

額安寺第8次発掘調査報告書

付 東池遺跡第1次発掘調査報告書



2003

大和郡山市教育委員会

額安寺第8次発掘調査報告書

大和郡山市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、大和郡山市額田部寺町36で実施した発掘調査の報告書である。
- 2 調査は、平成12年度の国庫補助事業（市内遺跡発掘調査等事業）として実施した。
- 3 調査期間、調査面積は下記の通りである。
　調査期間：2001年2月13日～3月31日
　調査面積：約200m²
- 4 調査は以下の組織で実施した。

現地調査

- 調査員：山川均（大和郡山市教育委員会　社会教育課）
　補助員：岡本智子（奈良大学大学院）
　作業員：安西工業（株）
　事務：大和郡山市教育委員会社会教育課
- 5 本書は、以下の分担で作成した。
　製図・拓本・トレイス：岡本
　写真撮影：山川、岡本
　執筆：山川〔I～IV、VI〕、岡本〔V、VII〕
　レイアウト：岡本
　編集：山川
 - 6 調査および報告書作成に際し、以下の方々に貴重なご教示・ご指導をいただいた（五十音順・敬称略）。
　芦田淳一、荒川清子、今尾文昭、追塙千尋、大垣さなあ、佐伯俊源、狭川真一、佐藤信、佐藤亞聖、水野正好、桃崎祐輔、山口英男。
 - 7 調査に関わる写真・スライド・実測図および出土遺物は全て大和郡山市教育委員会で保管している。広く活用されたい。
 - 8 現地調査に際しては、額安寺（代表　喜多寿佳氏）にはたいへんお世話になりました。記して感謝いたします。

凡　　例

- 1 遺構実測図に示した標高は、東京湾平均海面（T.P）からのプラス値である。
- 2 遺構実測図中の座標は、国土座標の第VI座標系に基づくものである。また、図中矢印で記した方位は座標北を表す。
- 3 遺物番号は全てが通し番号になっており、実測図、観察表、図版それぞれの対照が可能である。
- 4 遺物実測図の縮尺は1/3を基本とする。
- 5 遺物実測図の断面は、陶磁器・須恵器がベタ塗り、瓦器・瓦質土器・瓦が網かけ、土師器は白抜きとしている。
- 6 土色および遺物の色調に関しては、「新版標準土色帳」に依拠した。

本文目次

I 調査地周辺の環境	1
II 既往の調査	4
III 調査の契機および経過	6
IV 調査の概要	6
(1) 調査区	6
(2) 層序	6
(3) 上層遺構	6
(4) 中層遺構	6
(5) 下層遺構	11
V 出土遺物	12
(1) SD-101出土遺物	12
(2) 整地層出土土器・陶磁器	12
(3) SD-201出土遺物	14
(4) 塚仏	15
(5) 瓦	15
VI まとめ	17
VII 附編	18
(1) 蓮華唐草文軒平瓦の年代観	18
(2) 須安寺宝篋印塔について	19

図目次

図1 調査地および周辺の環境 (S : 1/25,000)	2
図2 周辺跡 (中世律宗関連)	3
図3 既往調査地 (S : 1/2,500)	5
図4 調査地西壁土層図 (S : 1/40)	7
図5 C-3区北壁土層図 (S : 1/40)	7
図6 上層遺構平面図 (S : 1/80)	8
図7 中層遺構平面図 (S : 1/40)	9~10
図8 下層遺構平面図 (S : 1/80)	11
図9 SX-101出土遺物実測図 (S : 1/3)	12
図10 整地層出土遺物実測図 (S : 1/3)	13
図11 サブレンチ (整地層) およびSD-201出土遺物実測図 (S : 1/3)	14
図12 整地層出土塚仏実測図 (S : 1/1)	15
図13 軒瓦実測図および拓影 (S : 1/3)	16
図14 大藏派宝篋印塔実測図 (S : 1/30)	20

表 目 次

表1 既往調査一覧	5
表2 遺物観察表1	21
表3 遺物観察表2	22

図 版 目 次

図版1 1 調査前風景（東より）	23
2 上層遺構完掘状況（南より）	23
図版2 1 築倉時代整地層最下面瓦破片敷詰め状況（東より）	24
2 同上（西より）	24
図版3 1 下層遺構完掘状況東（西より）	25
2 調査区西壁土層	25
図版4～6 遺物	26
図版7 1 頤安寺宝篋印塔遠景（北より）	29
2 頤安寺宝篋印塔西面	29
図版8 1 正暦寺宝篋印塔	30
2 元箱根宝篋印塔	30
3 余見宝篋印塔	30
4 安養院宝篋印塔	30

I 調査地周辺の環境（図1）

対象とする額田郡地域の歴史的環境については、服部・前園・上原2001で非常に詳細なものが公表されている。よってここでは今回最も顕著な成果をあげた鎌倉時代の遺跡を、この地とゆかりの深い良親房忍性の行動を軸にとりあげることにする。

鎌倉期の高僧・忍性は建保5年（1217）、式下郡屏風里（図1-1）に生まれた。額安寺（図1-2）からは直線距離にして2.5kmばかり南になる。忍性の出家は貞永元年（1232）、16歳の時母を失ったことを契機とした仮の出家である。「本朝高僧伝」（注1）ではその出家の場所を額安寺とするほか、「性公大徳譜」などでは母の菩提を弔った場が額安寺であるとしている。忍性の師にあたる叡尊（1201~90）の自伝「金剛仏子叡尊感身学正記」（注2）によれば、仁治元年（1240）3月8日、忍性は額安寺の「西辺之宿」に文殊图像を安置し、叡尊を招いて開眼供養を行った。現在、額安寺の西北約500mに位置する大和郡市山市西町の良福寺（図1-3）には13世紀前葉の造像とされる文殊菩薩像が現存するが（鈴木1991）、これと「学正記」記載の文殊画像との関係は不明である。同月末、忍性は正式に出家し、4月3日に西大寺において通受を受ける（注3）。

こうした非人宿に文殊像を供養しようとする忍性の動きに対し、額安寺から約2km北東に位置する馬司（図1-4）の住人・乗詮らが同調した（注4）。乗詮は当時、額安寺別当領「馬司莊」の荘官であった可能性が指摘されているように（細川1999）、額安寺と関係が深い在地有力者とみられる人物である。ちなみに馬司では発掘調査が実施されており、中世の大規模な遺跡が確認されている。中でも小字「堂の前」地区では溝で囲まれた方形の土壇状遺構が検出されており、溝内からは仏具と思われる土器類も出土している点は注目に値しよう（山川・岡本2001）。

乗詮は翌仁治3年（1242）1月、大和の非人宿七宿全てに文殊供養を実践した後に懇供養を行う願いを発し、忍性を通じて叡尊の下向を要請する。叡尊はこれに隨喜して応えるが、この機会を利用して、「額安寺住」の善春房學春が菩薩戒を授かるため彼の家に叡尊を招く。同月25日に和爾宿の文殊供養が終了したので、2月上旬に「額安寺の前屋」において梵網經古迹を開講、12日には學春の持仏堂にて菩薩戒を授ける。ちなみにこの學春の子息が西大寺二世長老の慈道房信空であり、この機会に叡尊を師として出家する。以上の点から、馬司と額安寺の密接な関係が読み取れると共に、額安寺と西大寺（叡尊）の結びつきが忍性を軸としていたことが読み取れよう。

忍性は建長4年（1252）、関東に下向し、常陸国三村山極楽寺に住す。その後、鎌倉幕府執権や連署などの重要なポストを独占していた北条氏の帰依を受け、北条重時の要請の元に鎌倉極楽寺の開山長老となる。その後は関東の仏教界において重きをなしていたが、正応3年（1290）、叡尊の入滅に伴い関西の寺院復興にも努めた。永仁6年（1298）、額安寺の塔本尊をまず西大寺に入れ、次いで額安寺に安置した。その経緯は現在法隆寺が所蔵する六角厨子台座の底銘に記されているが、現在額安寺が所蔵する重要文化財黒漆六角厨子は基壇が後補（正和5年=1316）であることから、この額安寺六角厨子が銘文中に記されている「塔本尊」厨子である可能性がある。

正安2年（1300）、忍性は関東に帰還し、嘉元元年（1303）、極楽寺において入滅。その遺骨は遺命によって極楽寺、額安寺、竹林寺に分骨された。額安寺五輪塔（図1-5）8基のうち「五輪塔I」は現状の高さ2.921mを測り、発掘調査により台座および地覆石の下に穿たれた土壇中から、石製外容器によって保護された銅製の骨蔵器が出土した。そして、そこに刻まれた銘文から忍性の墓であることが確定したのである（西藤ほか1983）。また、これの北隣の「五輪塔II」からは極楽寺二世長老の善頼房順忍とその弟子觀惠房の骨蔵器が発見されている。この他、忍性と直



図1 調査地および周辺の環境 (S : 1/25,000)



a 賴安寺



d 賴安寺五輪塔



b 良福寺文殊堂



e 賴田部瓦窯



c 馬込集落



f 板屋ヶ瀬橋

図2 周辺遺跡（中世律宗関連）

接関係するものではないが、前述の額安寺五輪塔に隣接する額田部瓦窯（図1-6）は丘陵の斜面を利用した半地下式の小規模なロストル式瓦窯である（岸1935）。残念ながら軒瓦が出土していないので詳細な年代は不明であるが、鎌倉時代頃のものとされる。なお、第Ⅶ章-（1）で詳しく触れるように、今回の発掘調査で出土した蓮華店草文軒平瓦が13世紀初頭と断定できた点、さらに大規模な整地がなされた時期もこの時期にあたることから、本瓦窯ではこのタイプの軒瓦が生産されていた可能性を指摘し得るであろう。

また、額安寺西方約500mに所在する阿土墓（図1-7）は奈良盆地周辺においてよく見られる憩墓形態の墓地であり、古墳の上に墓が作られている（今尾2000）。近世に「西山」と呼ばれていた共同墓地がこの阿土墓に該当するものかもしれない（細川1999）。

図1-8の板屋ヶ瀬橋は貞和3年（1347）に、額安寺においてこの橋と地蔵堂の供養が行われている（注5）。板屋ヶ瀬橋は交通の要衝に作られた橋であり、額安寺がこの橋に深く関与していたことが複数の史料から推定されている（今尾2000、太田1985）。先述の西辺の宿の存在も含め、忍性が若年期を過ごした額安寺がこうした性格を有した寺であったことには、後に報告する鎌倉時代の整地事業も含め、十分な留意が必要であろう。なお、図1-9の額安寺宝篋印塔については第Ⅶ章-（2）において詳しく触れている。

【注】

注1 忍性に関する史料については、基本的に田中敏子「忍性菩薩行実編年史について（一）～（八）」『鎌倉』44～51、1983～1986に挙げた。

注2 細川涼一訳注「感身学正記」東洋文庫、1999に掲載。以下「学正記」と略す。

注3 「極楽寺金剛骨藏器銘文」。

注4 「学正記」仁治2年（1241）条。

注5 「嘉元記」貞和3年3月条。

【参考文献】

- 今尾文昭 2000 「仮幕、忍性・律宗系集団と大和の遺跡」『仮幕・忍性と律宗系集団』同シンポジウム実行委員会事務局
太田清三 1985 「中世の民衆救済の諸相」『民衆生活と信仰・思想』慈山閣
岸熊吉 1935 「三井廻址及び額田部廻址調査報告」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』13
西藤清秀ほか 1983 「重要文化財額安寺五輪塔修理工事報告書」奈良県教育委員会
鈴木喜博 1991 「大和郡山西町の良福寺文殊菩薩薬師像と像内納入印仏について」『仏教藝術』199
服部伊久男・前田実矩男・上原真人 2001 「考古資料編」『国立歴史民俗博物館研究報告』88
細川涼一 1999 「仁治2年条訳注」『感身学正記』東洋文庫
山川均・岡本智子 2001 「馬司遺跡第1次発掘調査報告書」大和郡市市教育委員会

II 既往の調査

既往の調査については表1-文献④において詳細に述べられているので、ここでは図2および表1に概要を記載するに留める。

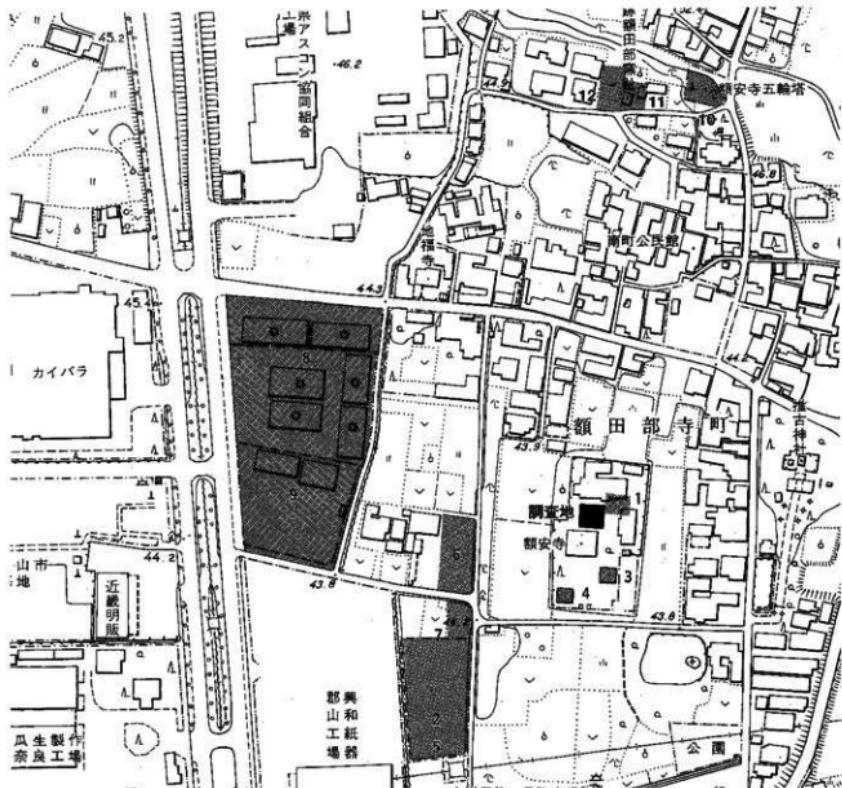


図3 既往調査地 (S:1/2,500)

No.	遺跡名・調査次数	調査地	調査面積	調査の概要	文献
1	額安寺第1次	額田郡寺町36	140m ²	礎石建物、井戸、土坑など	①
2	額安寺第2次	額田郡北町1305他	102	土器、溝、井戸、土坑	②
3	額安寺第3次	額田郡寺町36	35	瓦溜り、柱穴	①
4	額安寺第4次	額田郡寺町36	31	包含層から埴輪片、須恵器片など出土	③
5	額安寺第5次	額田郡北町1305他	300	井戸4、土坑5、溝2	④
6	額安寺第6次	額田郡北町1297-1他	104	井戸4、溝3、土坑2	④
7	額安寺第7次	額田郡北町1298他	30	蓋掘溝	④
8	垣内墳跡第1次	額田郡北町1247-1他	660	掘立柱建物3、掘立柱構、溝2、落込3	④
9	垣内遺跡第2次	額田郡北町1246-1他	500	掘立柱建物4、溝3、落込2	④
10	額安寺五輪塔	額田郡寺町57	32	五輪塔下から舍利容器等出土	⑤
11	額田部窯跡第1次	額田部北町1182-1他	23	平窯を3基検出	⑥
12	額田部窯跡第2次	額田部北町1179-1他	28		④

表1 既往調査一覧

【文献】

- ①前園実如男 1981「大和郡山市鶴安寺旧境内発掘調査概報」「奈良県埋蔵文化財調査報告書1979年度」奈良県立櫻原考古学研究所

②清瀬知夫 1974「大和郡山市鶴安寺旧境内発掘調査概報」「奈良県埋蔵文化財調査報告書1978年度」奈良県立櫻原考古学研究所

③前園実如男 1984「大和郡山市鶴安寺旧境内発掘調査概報」「奈良県埋蔵文化財調査報告書1985年度」奈良県立櫻原考古学研究所

④服部伊久男 2001「鶴安寺及びその周辺における発掘調査」「国立歴史民俗博物館研究報告」88

⑤西藤清秀 1983「重要文化財鶴安寺五輪塔修理工事報告書」奈良県教育委員会

⑥岸根吉 1935「三井麻績及び鶴田部屋跡調査報告」「奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告」13 奈良県教育委員会
※詳細は文獻にて掲載いたします。

III 調査の契機および経過

今回の調査は、額安寺境内において、同寺の主要伽藍の変遷など、具体的な地下遺構の把握を目的として実施したものである。第Ⅱ章（表1）で触れたように、従前の額安寺旧境内の調査では古代の瓦は出土するものの、遺構に関しては中近世の小規模なものが検出されているに過ぎず、またそれらに関する具体的な評価もほとんどなされていない。今回の調査では従来の調査において未確認であった平安時代以前の遺構を確認し、古代の額安寺の伽藍配置の一端を知ることを目的とした。また、寂尊ら西大寺流の律僧によってなされたとされる鎌倉期の復興に関して、具体的なデータを得ることも今一つの目的とした。

調査は平成13年2月13日より開始し、同年3月31日に終了した。

IV 調査の概要

（1）調査区（図3）

今回の調査区は、本堂北側（裏手）に一辺10mの正方形で設定した（調査面積約100m²、延べ調査面積約200m²）。当該部位は昭和50年に実施された第1次調査の西側隣接地にあたる（図3）。なお、この第1次調査では近世の井戸や小規模な礎石建物、溝などが検出されている（表1）。

（2）層序（図4）

昭和50年頃に行われた車裏の建築に伴う盛土（図4-①層）約50cmを除去すると、にぶい黄色を呈する砂質土層（②層）に至る。本層は、慶長年間に建立された現在の本堂建築の際の盛土と考えられるものである。当該層下は黄褐色の砂質土層（⑤～⑦層）であり、内に焼土塊や炭化物を包含するが、当該層は出土遺物より室町時代後期と想定されることから、これらは明応8年（1499）の赤沢朝經による大和侵入の際の焼土である可能性が高く、当該層はその後の整地層と考えられるものである。なお、本層の上面より掘り込まれているのが後述の上層遺構である。本層を除去すると、にぶい橙色を呈する、ひじょうに堅く締まったシルト質土層に至る（⑧層）。当該層以下が今回主要な成果となった鎌倉時代の整地層（⑫～⑯層）であり、詳細は（4）中層遺構で述べる。

（3）上層遺構（図6）

上層遺構としては、小規模な掘立柱柱列および溝状遺構、小溝などが検出された。このうち掘立柱柱列と小溝は、実際にはこの遺構面より一面上層の遺構である（図4-⑤層上面）。柱列は、掘方から出土した瓦質土器から16世紀前葉頃のものと思われる（今回未図示）。また、調査区南端の落ち込みSX-101からは15世紀後葉に属する中国製の白磁皿と15世紀中葉の瓦質土器擂鉢が出土しており（図9）、この遺構面（⑧層上面）の時期を示している。SX-101は南半部分が未検出だが、北の肩は東西方向に直線的に伸び、東端部分でやや北に張り出す。深さ10cm程度の深い遺構である（図6参照）。

（4）中層遺構（図7）

本報告において中層遺構とするのは、後述の通り鎌倉時代前期の盛土痕跡である。今回は国土座標に基づくグリッド（3m間隔のメッシュ）を設定し、人力による掘り下げを実施した。その結果、鎌倉期の大規模な整地痕跡を確認することができた。層序の観察所見を基にその作業内容

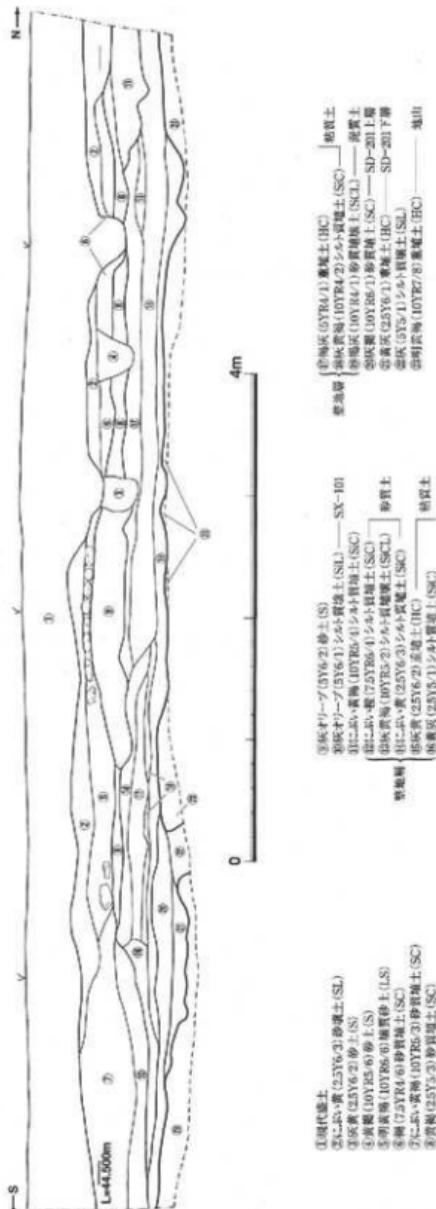


図4 調査区西壁土層図 (S:1/40)

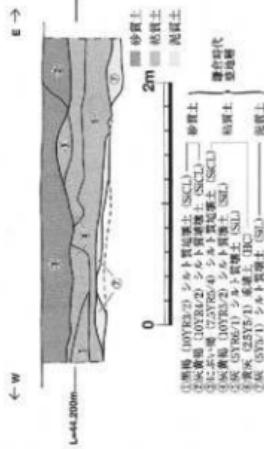


圖 5 C=3 区北端示意图 ($\xi : 1/40$)

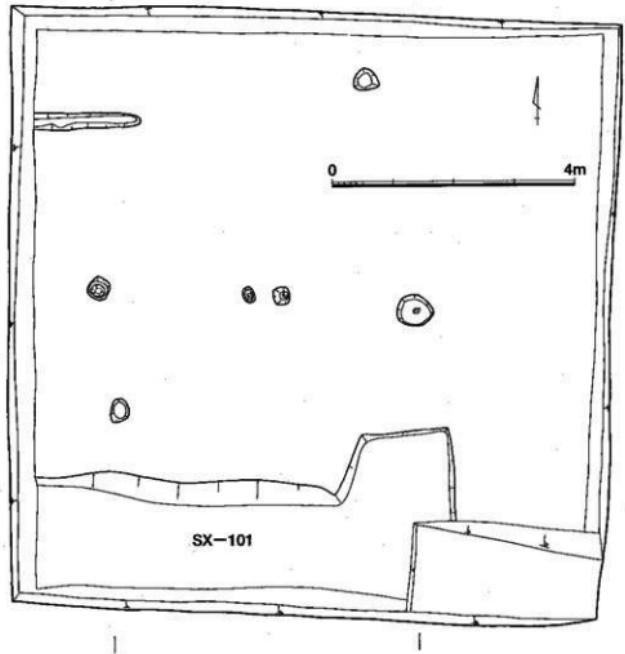


図6 上層遺構平面図 (S: 1/80)

を復元すると、まず褐灰色を呈する泥質土中（図5-⑦層）に多量の瓦碎片を敷き詰め、その上に厚さ20cm程度の粘質土（③～⑥層）を被せ、さらにその上に同程度の厚さの砂質土（①、②層）を置く、というものになる。

瓦敷き（図7）は調査地の南半において特に密で、北はやや粗くなる傾向が見られた。また、瓦片は後述の下層遺構SD-201の上面ではやや大型のものが用いられていた。これに比し、粘質土層と砂質土層の層厚は調査区全体において大きな差はない。ちなみに、上記した砂層上面は非常に硬化しており、調査中においても、雨天の後はその上面が短時間の内に乾燥することが観察できた。

以上の点から、こうした地業は土地条件の悪い部分の改良工事として施されたものである可能性が高い。時期は、出土した瓦器碗や土師皿から13世紀初頭頃に比定される。なお、C-4区からは例外的に13世紀中葉～後葉の瓦器碗が出土しているが、この点の解釈についてはこの地区的表面的に検出できなかった遺構による混入か、もしくは整地の時間幅を示すものと思われる。今回の調査では不注意から図5-①、②層とそれ以下の整地層の遺物を分層せずに取り上げたので、

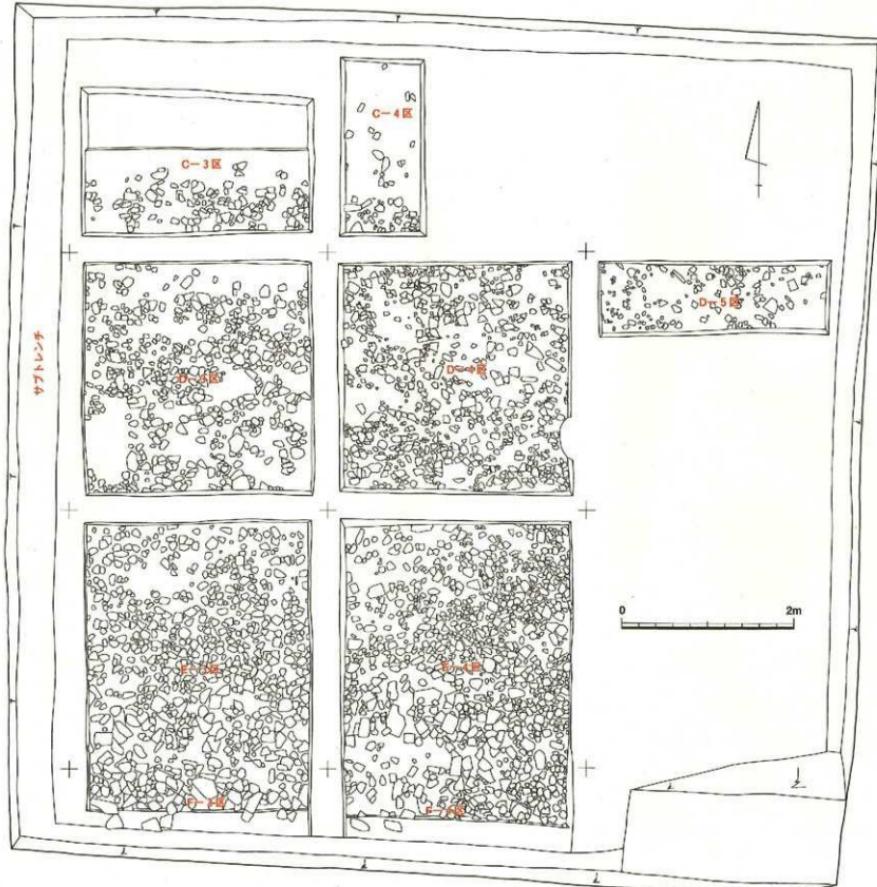


図7 中層造構平面図 (S : 1/40)

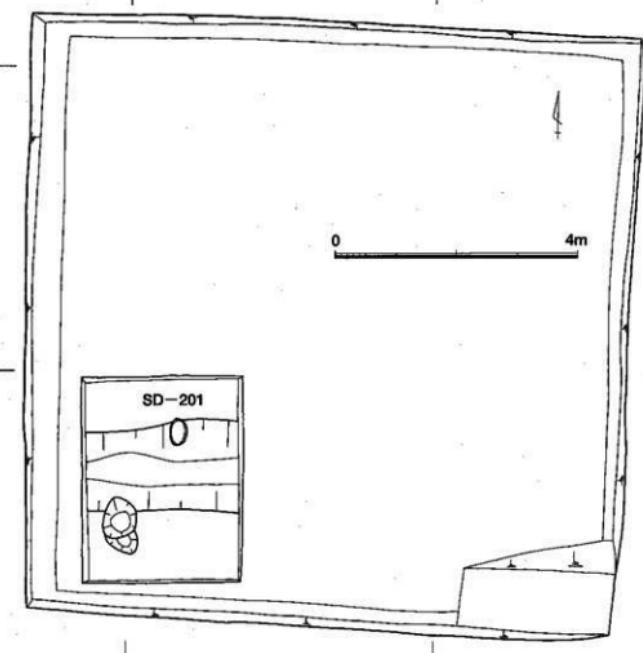


図8 下層遺構平面図 (S: 1/80)

①、②層が形成された（盛土）時期がそれ以下に遅れる可能性もある。この点については今回の調査では明確にはできず、今後の周辺調査による解決を待ちたいと考える。なお、この整地面の上に当該時期の顕著な遺構が営まれた痕跡はなく、調査地周辺は鎌倉時代には基本的に空閑地であった可能性が高い。

(5) 下層遺構（図8）

下層遺構は、調査区南西隅のグリッド1カ所（E-3区）を掘り下げて確認したもので、地山面に直接掘り込まれている。溝やピットが検出されているが、この内、溝SD-201については幅約150cm、深さが約20cmを測る東西に伸びる直線的なもので、その方向性は方眼方位にはば主軸が乗るものである（土層断面は図4参照）。堆積土は2層に分かれ、その内上層からは11世紀後葉～12世紀初頭の遺物が出土しているほか、9世紀中葉の遺物も混在する。また、下層からは7世紀末～8世紀初頭の須恵器や土師器が出土している。したがって、本遺構は8世紀に下半部が埋没し、その後平安期を通じて機能した後、12世紀初頭までにほぼ埋没したものと考えられる。ちなみにこのSD-201は額安寺境内において初めて検出された古代に遡る時期の遺構である。

V 出土遺物



図9 SX-101出土遺物
実測図 (S:1/3)

C-3区出土遺物 (5~15)

5~11は土師皿である。5は復元口径9.0cmに対して、器高は1.3cmと低い。平坦な底部をもち、口縁端部外面には面をもっている。にぶい橙色を呈する。6は口径10.6cm、器高1.2cmを測り、色調は灰白色である。7、8は器高が2cm程度と高く、平坦な底部から口縁を上方に強く屈曲させている。口縁に強いナデを施しているため、外面には段がつく。色調はにぶい橙色で、8には口縁に煤が付着している。9、10は口縁端部に面取りを施している。9は口径13.2cm、器高1.8cmであるが、10は口径9.4cm、器高1.1cmとやや小さい。两者とも胎土は比較的精良で、橙色を呈する。11は口縁形状がまるみをおび、胎土には雲母が多く含む。12は中国製青磁の皿である。釉色は灰オリーブ色を呈する。13~15は瓦器碗である。いずれも川越編年（川越1983）Ⅲ-A型式に属するものである。

これらの遺物はおおむね13世紀初頭に位置付けられる。

C-4区出土遺物 (16~18)

16は小型瓦器碗である。復元口径9.6cm、器高2.8cmを測り、口縁端部には面をもつ。見込みには平行線状暗文を施す。17、18は川越編年Ⅲ-C~D型式に属すると考えられる瓦器碗である。本層出土遺物中では最も新しい時期の遺物である。17は外面のミガキが省略され、内面のミガキも粗い。

C-5区出土遺物 (19、20)

19、20は瓦器皿である。口径はともに9.8cm、器高は1.8cm程度を測る。口縁のナデは強く、口縁端部には面をもち外反する。見込みには10往復程度のジグザグ状暗文を施す。

E-4区出土遺物 (21、22)

21、22は瓦器碗である。底部径は6.5cm程度を測る。21は川越編年I-D型式、22はI-B型式に属するものと考えられる。21はミガキが3mm弱と太く、高台は外側にふんぱり、見込み部分の各ミガキの間にはナデの調整痕が見られる。22の見込みには密に平行線状のミガキを施す。これらの遺物は11世紀後半~12世紀初頭に位置づけられ、後述SD-201上層遺物の混入と考えられる。なお、本地区でも13世紀初頭の瓦器碗等の碎片が出土している。

D-4区出土遺物 (23~28)

(1) SD-101出土遺物 (1~4)

1、2は近世の土師皿である。口径はそれぞれ6.6cm、7.4cmと小型である。器壁は厚く、胎土には雲母を多く含む。色調はにぶい橙色を呈する。3は瓦質土器摺鉢である。口縁端部内面は幅1cm程度の面をもつ。近江編年3期（近江1994）、佐藤編年D期（佐藤1996）に属する。15世紀中葉。4は中国製白磁の端反皿である。底部には初紋が付着する。15世紀後半のものと考えられる。

(2) 整地層出土器・陶磁器

本層出土遺物は、多くが細片で図化できるものはわずかしかしない。遺物は地区ごとに取り上げを行ったが、各地区的組成には若干の時期差が認められた。したがって、ここでは図化可能なものについて地区ごとに報告を行う。

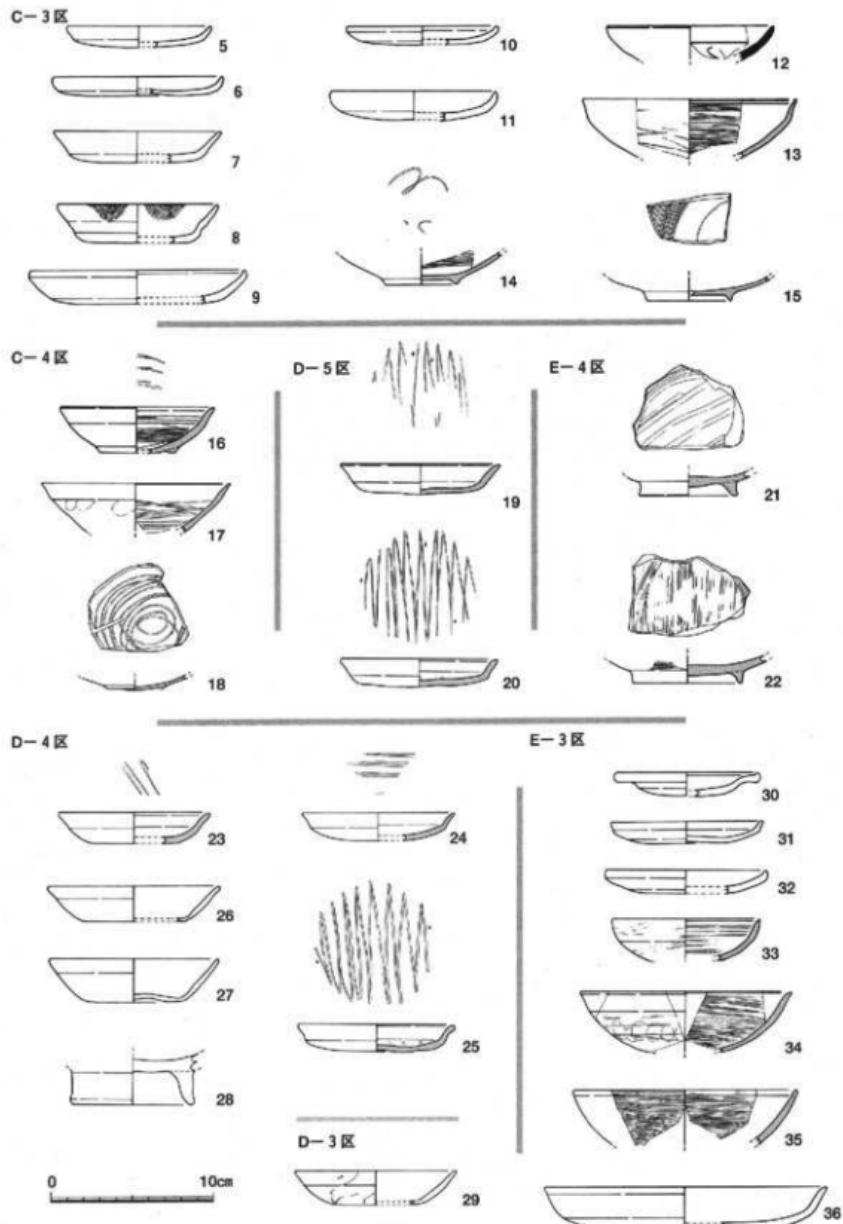


图10 整地层出土遗物实测图 (S: 1/3)

23~25は瓦器皿である。24は23、25に比し、器壁が薄く、口縁部に強くナデを施す。いずれも見込みにはジグザグ状の暗文を施している。26、27は土師皿で、口径約10.5cm、器高約2.5cmを測る。口縁は斜め上方に直線的に屈曲させる。赤褐色を呈し、胎土には雲母を多く含む。28は黒色土器A類碗の底部である。

D-3区出土遺物 (29)

29は26、27と同タイプの土師皿である。外面には粘土の貼付け痕が明瞭に残る。

E-3区出土遺物 (30~36)

30~32は土師皿である。30は「て」字状の口縁を有する。器壁は厚く、口縁の屈曲もゆるい。「て」字状口縁の中でもやや新しい段階のものと考えられる。31は底部内面に一方向ナデ、口縁は2段階にヨコナデを施し、端部を上方に突出させる。32は口縁端部外表面を面取りしている。31、32とも色調は灰白色を呈している。33は小型瓦器碗である。口縁形状はやや丸みを帯び、端部には沈線が入る。34、35は瓦器碗である。34は川越Ⅲ-A型式に属する。35は小片であるので詳細な時期は不明であるが、内外面ともに密にミガキを施していることから、I段階のうちには収まると考えられる。36は土師皿で、口径17.4cm、器高2.7cmを測る。口縁はゆるやかに内側に内側に收まる。灰白色。

サブトレンチ出土遺物 (37~39)

37、38は土師皿である。37は復元口径8.8cm、器高1.6cmを測り、器壁はやや厚い。口縁には2段階のヨコナデを施す。38は復元口径10.5cm、器高1.3cmを測る。口縁には2段階の強いヨコナデにより、内外面ともに段がついている。39は黒色土器A類碗の底部である。森福年Ⅷ期に属するものであろう（森1990）。

(3) SD-201出土遺物

下層出土遺物 (40, 41)

40、41は須恵器環Bの蓋である。40は復元口径15.0cm、口縁部に強くヨコナデを施し、端部は突出させる。41は復元口径15.8cmを測る。いずれも飛鳥V型式（7世紀末～8世紀初頭）に属するものと考えられる（古代の土器研究会編1992）。

上層出土遺物 (42~48)

42、43は「て」字状口縁の土師皿である。43は42に比して器壁が薄く、屈曲も強い。44は瓦器碗の底部である。復元底径6.6cmで、器壁は厚く、しっかりした底部をもつ。見込みには平行線上の暗文を密に施す。川越I-C型式に属するものと考えられる。45~48は土師皿である。

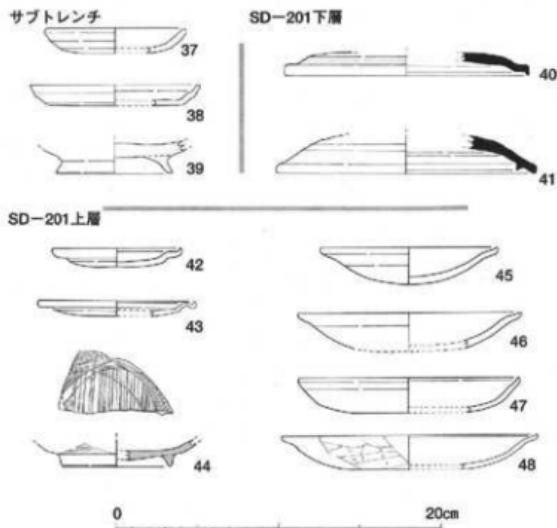


図11 サブトレンチ（整地層）およびSD-201出土遺物実測図（S:1/3）

る。45は器壁が厚く丸底で、口縁端部内面はヨコナデを施すことによってわずかに凹む。焼成はあまり。46は復元口径13.8cm、口縁端部にヨコナデを施し外反させる。47は口縁をゆるやかに屈曲させ、端部にはヨコナデを施し面をもつ。48は復元口径15.8cmを測り、端部は内側にわずかに折り返している。底部外面はケズリ、口縁端部外面にはユビオサエによる調整痕が残る。

これらの遺物は42~43が11世紀後半、45~48は9世紀中葉（三好1995）のものと考えられる。

(4) 塔仏 (49)

49は、D-3区整地A層中から出土した塔仏である。如来であると考えられるが、顔上面部分しかないと詳細は不明である。肉髻部分と顔の左側に金箔片がわずかに残る。幅は39.2mm。型作りで、裏面には指頭圧痕が明瞭に残る。土師質で、胎土は精良である。像容等から古代のものであると考えられるが（注1）詳細は不明である。

(5) 瓦 (50~56)

50~53は奈良時代の瓦である。50は鋸歯文縁単弁蓮華文軒丸瓦。内区文様は単弁蓮華文、外区には鋸歯文を巡らせる。從来額田寺で確認されていないタイプである。51は均整唐草文軒平瓦である。顎の形態は段顎である。額田寺表採瓦（山川1995）の中でD1とされたものと同范で、8世紀初頭から前半とされている。52は鋸歯文縁複弁蓮華文軒丸瓦である。内区文様に複弁蓮華文、外区内縁に珠文帯、外縁に線鋸歯文を施し、外縁外周に2本の沈線を巡らせる。53は唐草文縁単弁蓮華文軒丸瓦で、内区文様は単弁蓮華文、外区内縁には珠文帯、同外縁には偏行唐草文を配する。額田寺表採瓦のhと同范である。54は蓮華唐草文軒平瓦である。E-3区SD-201上層から出土した。顎の形態は段顎B II（小沢1990）で、四型台の使用痕が残る。凹面には布目痕、瓦当裏面はヨコナデによる調整痕が認められる。瓦当文様は、額安寺第3次調査で出土しているもの中に同范と考えられるものがある（前園1980）。また石田茂作表採の額安寺軒平瓦とも同范である可能性が強いが（石田1936）、石田表採瓦は左半分のみであるのに対し、本遺跡出土品は左半分を欠損しているため、確認不可能である。なお、本調査および第3次調査出土のものは段顎であるが、石田表採瓦は曲線顎を有している。山崎信二は後者について、顎形態から平安末期に位置付けている（山崎2000）。本軒平瓦が出土したSD-201上層の年代観は11世紀後半～12世紀初頭頃であるが、石田表採軒平瓦との相関関係からすると、本軒平瓦は直上の整地A層からの混入である可能性が強く、12世紀後半～13世紀初頭のものであると考えられる（年代観については冒頭（1）参照）。55は左三巴文軒丸瓦である。珠文は16個を数える。巴頭は半球状に肥厚し、巴の内側に稜線をもつ。凹面には鉄線引の痕跡が残る。江戸時代中期。36は左三巴文鳥糞である。珠文は13個。瓦当外縁の幅は上端部が広くなる。側面は縱方向のヘラケズリにより調整する。江戸時代中期。

[注]

注1 年代観については鈴川真一氏のご教示を得た。

【参考文献】

石田茂作 1936「飛鳥時代寺院址の研究」第一書房

近江俊秀 1994「人和瓦質摺鉢考」「研究紀要第2集」由良大和古代文化研究協会

小沢毅 1990「瓦塘」「西大寺防災施設工事・発掘調査報告書」西大寺

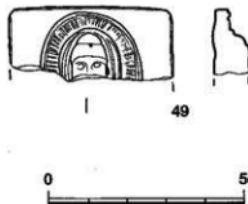


図12 整地層出土塔仏実測図 (S:1/10)

川越後一 1983「大和地方の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会

古代の土器研究会編 1992『都城の土器集成』

佐藤重型 1996「大和における瓦質土器の展開と変遷」『中近世土器の基礎研究』II

*前川実知雄 1980「額安寺田境内発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1979年度』奈良県立橿原考古学研究所

三好美穂 1995「南部における平安時代前半期の土器様相」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』奈良市教育委員会

森隆 1990「西日本の黒色土器牛窓（上）」『考古学研究』37-2

森田翁 1982「14-16世紀の白磁の分類と発展」『貿易陶磁研究』2

山川均 1995「額安寺田境内表探査瓦調査報告」大和郡山市教育委員会

山崎信二 2000「蓮華唐草文軒平瓦」『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所

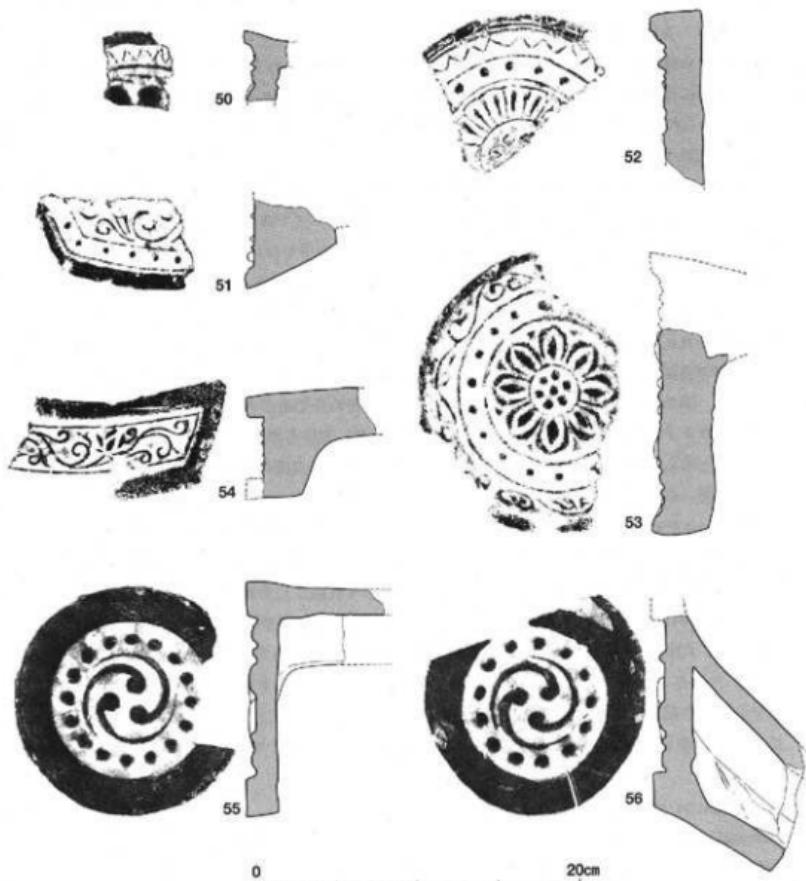


図13 軒瓦実測図および拓影 (S:1/3)

VI まとめ

以下に、今回の調査によって得られた主要な知見とその評価について略述する。

- ①調査地周辺には、7世紀末～8世紀初頭には正方位の溝が存在していた。しかし、この時期の遺構は地表面から直接掘り込まれており、整地痕跡などは認められないことから、当該区域は古代においては中心伽藍からははずれた位置にあたるものと考えられる。
- ②13世紀初頭に、今回の調査地周辺には大規模な整地が行われる。この盛土整地地業は最下部に瓦の碎片を敷き詰め、そのうえに粘質土とシルト質土を互層にするというもので、何らかの体系だった技術的背景が想定できる。また、13世紀中葉～後葉にかけてさらに整地が行われた可能性が高い。
- ③上記②のほか、ここでは室町時代後期と江戸時代初頭の2時期の盛土が認められる。

以上のうち、特に②については、その時期がちょうど鎌倉時代の高僧・忍性（鎌倉極楽寺長老）の額安寺止住時期に近い点は注目される。むろんこの時期、忍性は若年であり、該期の額安寺復興の主体者が彼であるとは考えられないが、少なくとも忍性が後年、その生涯の主要な作善行為として挙げた作道や架橋事業の技術的背景の一端は、今回の調査によって明確に示されたものといえるだろう。勧進型的な要素を多分に有する忍性が、関東下向などに際してこうした工人集団を配下に組織した可能性は高く、両者の接点が今回の調査で明確になったものといえる。

また、鎌倉期における額安寺の復興は、今回の調査所見による限り、從前共通の認識となっていたような忍性の大和還住の頃（13世紀末）のことではなく、13世紀初頭、すなわち同寺が西大寺流に包摂される以前のことであった。したがって額安寺の鎌倉再興は、西大寺流の手によるものというより、具体的には同寺を拠点とした浄土教系の勧進聖集団によるものと考えられる（追塩1994）。さらにその背景には、大和川水運板屋ヶ瀬橋に関わる利権掌握の意図が想定し得るが、こうした寺の再興を媒介とした主要交通要衝の把握という視点も、後年の忍性の教団経営政策に何らかの影響を与えた可能性は指摘できるだろう。

以上のように、今回の調査は從来良好な調査データがあまりなかった鎌倉期の土木技術の一端を具体的に知り得たのみではなく、それが額安寺旧境内の調査であったということから、勧進聖としての忍性の原点を発掘資料から確認したものとも評価できる。今後の研究に与える影響はきわめて強いものといえるだろう。

【参考文献】

追塩千尋 1994「忍性の宗教活動」『中世の南都仏教』吉川弘文館（初出は1980）

VII 付編

(1) 蓮華唐草文軒平瓦の年代観

山崎信二是、三村山極楽寺出土の4種の軒平瓦および薬師寺・唐招提寺・法隆寺・円教寺間で同范の軒平瓦が、いずれも1260年代以前に遡ることは難しい瓦当貼り付け技法によることから、南都の蓮華唐草文軒平瓦の年代は1270年代にあるとした（山崎1993）。しかし佐川正敏は、1318～1324年の法隆寺上御堂の再建軒平瓦である274B型式より他のものは古くできないとし、蓮華唐草文軒平瓦の初現を1300～1320年代頃まで下らせた（佐川1995）。一方、桃崎祐輔は蓮華唐草文軒平瓦の編年を行う中で、額安寺において石田茂作が報告している軒平瓦を忍性により大塔本尊施入がなされた永仁6年（1298）前後とし、額安寺→法隆寺274A→法隆寺274Bとの変遷を示した（桃崎1996）。これらを受けて山崎は佐川、桃崎の見解を批判し、蓮華唐草文軒平瓦は平安末には出現していることを指摘し、その根拠として顎形態が曲線顎である額安寺軒平瓦（石田1936）をあげた。そして、鎌倉時代の蓮華唐草文軒平瓦はこれら平安末に出現する蓮華唐草文の復古瓦であり、鎌倉時代のどの段階で出現してもおかしくないとした（山崎2000）。

今回の調査で出土した蓮華唐草文軒平瓦（54）は、上述した石田報告のもの、および額安寺第3次調査出土のものと同范である可能性が強い。第V章に報告したとおり、石田報告瓦は顎形態が曲線顎であるが、第3次調査および本調査出土のものは段顎になる。本調査では、この蓮華唐草文軒平瓦は11世紀後半～12世紀初頭のSD-201上層から出土しているが、直上の整地A層からの混入である可能性が高い。整地A層はIII-A型式の瓦器碗を共伴していることから、蓮華唐草文軒平瓦の年代観は13世紀初頭をくだらないものと考えられる。

つまり、額安寺軒平瓦として報告されていた曲線顎を有し、山崎が平安末と位置付けたものと同じと考えられる範が、おそらく13世紀初頭には段顎形態の軒平瓦に採用されていたことが明らかとなり、蓮華唐草文は13世紀末～14世紀にかけて律宗関係寺院で多用されるようになる以前の平安末段階に、額安寺において出現していることが証明された。

【参考文献】

- 石田茂作 1936『飛鳥時代寺院址の研究』第一書房
佐川正敏 1995「鎌倉時代の軒平瓦の編年研究」「文化財論叢」II 奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集刊行会
桃崎祐輔 1996「鎌倉時代蓮華唐草文軒平瓦の系譜と年代」「考古学雑誌」
山崎信二 1993「考察 三村寺軒平瓦の年代」「三村山極楽寺遺跡群総合調査報告書」つくば市教育委員会
2000「蓮華唐草文軒平瓦」「中世瓦の研究」奈良国立文化財研究所

(2) 頬安寺宝篋印塔について

額安寺現境内の東方に「明星池」と呼ばれる池があるが、この中島に1基の宝篋印塔が立っている(図14-1)。以前は池の北堤付近に倒壊していたようであるが、1974年に清水俊明によって発見された(清水1974)。基礎は2区に分かち格狭間を大きく描き、基礎上と笠下部分の段は各3段になる。塔身には月輪内に金剛界四仏の種子を薬研影し、二重の輪郭を有する。隅筋は1弧で古相を呈する。笠上の段は6段で、露盤も基礎と同様、2区に分かって格狭間を刻んでいる。総高284cm、花崗岩製である。

本塔が注目される点は、現東面の基礎格狭間に「文応元年 十月十五日 願主 永弘」「大工 大藏 安清」の銘を有していることである。大藏安清は鎌倉後期を代表する工匠集団、大藏派の一人であり、文応元年(1259)銘を有する額安寺塔は数ある「大藏派宝篋印塔」中でも最古の遺品である。また大和においては正元元年(1260)銘の奥山往生院塔に次いで古い宝篋印塔もある。

大和には、奈良市菩提山町正暦寺にも大藏派の手によると考えられる遺品がある(図14-2)。この塔は額安寺塔と同様、基礎や露盤に格狭間を刻み、塔身には二重の輪郭を有し、基礎上の段数が3段になるなど、関西における他の宝篋印塔には見られない特徴を有しているが、隅筋が2弧で、複弁反花座を有する点などに額安寺塔よりも新しい要素が認められる(紀年銘はない)。大藏派のこの後の遺品は、神奈川県足柄下郡箱根町元箱根にある(図14-4)。精進池のほとりにある高さ265cmの宝篋印塔には「永仁四年(1296)」「大工大和国所生左衛門大夫 大藏安氏」の銘がある。この塔は正安2年(1300)に追刻がなされており、この時に「供養導師良觀上人」「心阿」の名が刻まれる。良觀上人とは言うまでもなく額安寺中興をなした良觀房忍性のことであり、ここに布教・勸進活動を行う忍性に伴なって関東へと移動する大藏派という構図が見出せるのである。

大藏派はこの後、神奈川県足柄上郡大井町上大井(嘉元2年〔1304〕銘、通称「余見塔」、図14-3)や、同厚木市愛甲の円光寺(「大藏」銘なし)にも大藏派宝篋印塔を造立し、元箱根塔に名を残す「心阿」もまた大藏派と同様式の宝篋印塔を鎌倉市安養院(図14-5)などに造立している。さらに「心阿」の子の「光弘」も鎌倉市覺園寺に、2基の大藏派宝篋印塔を造立している。これら大藏派がもたらした様式は、やがて「関東形式」宝篋印塔(川勝1936・1960・1974)の原形となっていた(岡本2003)。

大和における額安寺塔は、大藏派が大和において実際に活動していた石工であることを実証する唯一の貴重な遺品である。また、額安寺には忍性の舍利容器が納入されていた石造五輪塔も存在しており、これらの遺品は忍性と石工との関係を探る上でも重要である。

【参考文献】

- 岡本智子 2003 「大藏派宝篋印塔の研究」「戒律文化」2
川勝政太郎 1936 「宝篋印塔に於ける関西形式と関東形式」「考古学雑誌」26-5
1960 「関東形式宝篋印塔の成立」「鎌倉」4
1974 「大藏派宝篋印塔と関係遺品」「史迹と美術」449
清水俊明 1974 「大和額安寺の宝篋印塔」「史迹と美術」446

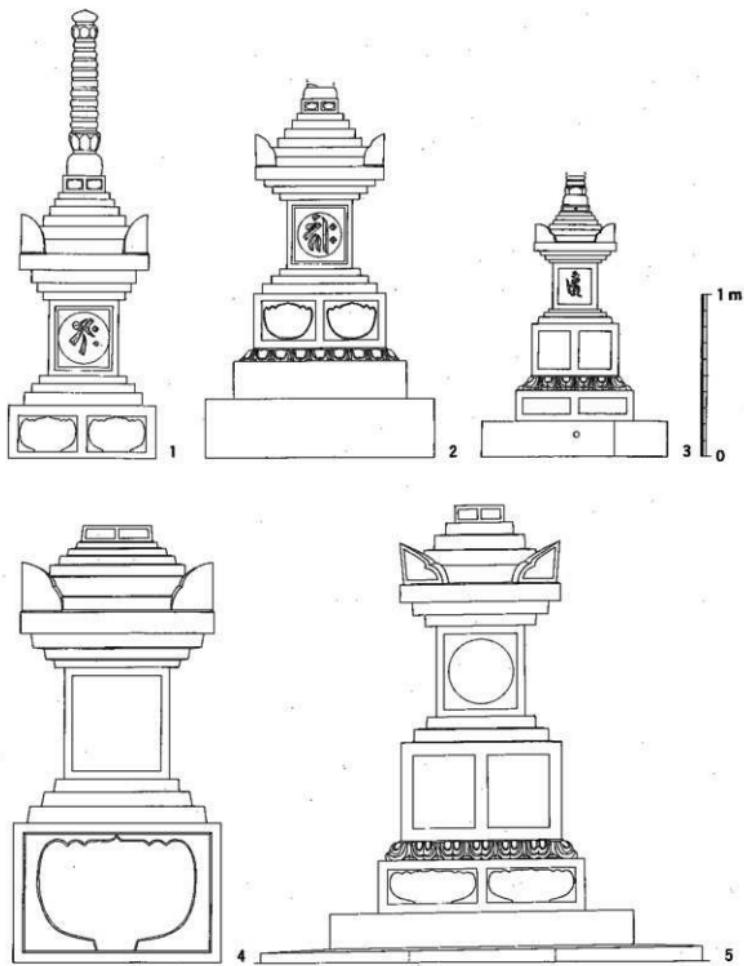


図14 大藏派宝篋印塔実測図 (S : 1/30)

- 1 : 須安寺宝篋印塔 2 : 正暦寺宝篋印塔 3 : 余見宝篋印塔 4 : 元箱根宝篋印塔
 5 : 安養院宝篋印塔 (財団法人文化財建造物保存技術協会編「重要文化財安養院宝篋印塔保存修理工事報告書」安養院、1980より再トレース)

No.	器種名	計測値 (cm)	色調	備考
SX - 101				
1	土師皿	口 (6.6) 高 (1.7)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	
2	土師皿	復口 (7.4) 高 (1.4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	
3	瓦質擂鉢		灰白 (10YR8/1)	
4	中国製白磁皿	復口 (10.2) 高 (3.0) 底 (5.1)	灰白 (5Y8/1)	佐藤編年D期 疊付付近に軽級付着
整地A層				
5	土師皿	復口 (9.0) 高 (1.3)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	
6	土師皿	復口 (10.6) 高 (1.2)	灰白 (10YR8/2)	
7	土師皿	復口 (10.4) 高 (1.9)	明褐色 (7.5YR6/6)	
8	土師皿	復口 (10.0) 高 (2.4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	口縁に媒付着
9	土師皿	復口 (13.2) 高 (2.1)	橙 (5YR7/6)	
10	土師皿	復口 (9.4) 高 (1.1)	橙 (7.5YR6/6)	
11	土師皿	復口 (10.2) 高 (1.8)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	
12	中国製青磁皿	復口 (10.4) 高 (1.9)	[難]灰オリーブ (5Y6/2)	
13	瓦器碗	復口 (13.2)	灰白 (N8/0)	
14	瓦器碗	復底 (4.6)	灰 (N5/0) [断]灰白 (5Y8/1)	川越III-A型式
15	瓦器碗	復底 (5.2)	灰 (N5/0) [断]灰白 (5Y8/1)	川越III-A型式
16	小型瓦器碗	復口 (9.6) 高 (2.8) 復底 (4.6)	灰 (N5/0) [断]灰白 (2.5Y8/1)	川越III-C型式
17	瓦器碗	復口 (11.6)	灰 (N6/0) [断]灰白 (2.5Y8/1)	川越III-C型式
18	瓦器碗	復底 (3.4)	灰白 (2.5Y7/1) [断]灰白 (2.5Y8/2)	川越III-C型式
19	瓦器皿	口 (9.8) 高 (1.9)	灰 (N6/0) [断]灰白 (N8/0)	
20	瓦器皿	口 (9.8) 高 (1.8)	灰白 (N7/0) [断]灰白 (N8/0)	
21	瓦器碗	復底 (6.2)	灰白 (N7/0) [断]灰白 (5Y8/1)	川越I-D型式
22	瓦器碗	復底 (6.8)	灰 (N5/0)	川越I-B型式
23	瓦器皿	復口 (9.4) 高 (1.9)	灰 (N5/0) [断]灰白 (2.5Y8/1)	
24	瓦器皿	復口 (9.4) 高 (1.7)	灰白 (N7/0) [断]灰白 (5Y8/1)	
25	瓦器皿	復口 (9.6) 高 (1.7)	灰白 (N6/0) [断]灰白 (N8/0)	
26	土師皿	復口 (10.6) 高 (2.2)	明赤褐色 (5YR5/6)	
27	土師皿	復口 (10.4) 高 (2.6)	明赤褐色 (5YR5/6)	
28	黒色土器碗	復底 (7.3)	[外]にぶい橙 (7.5YR7/4) [内]黒褐色 (7.5YR3/2)	A類
29	土師皿	復口 (10.0) 高 (2.1)	橙 (5YR6/8)	
30	土師皿	復口 (9.0) 高 (1.5)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	「て」字状口縁
31	土師皿	復口 (9.4) 高 (1.5)	灰白 (10YR8/2)	
32	土師皿	復口 (10.0) 高 (1.5)	灰白 (10YR8/2)	
33	小型瓦器碗	復口 (9.2)	灰 (N4/0) [断]灰白 (5Y8/1)	
34	瓦器碗	復口 (13.0)	灰 (N5/0) [断]灰白 (5Y8/1)	川越III-A型式
35	瓦器碗	復口 (13.6)	灰 (N5/0) [断]灰白 (N8/0)	川越I-B-C型式
36	土師皿	復口 (17.4) 高 (2.7)	灰白 (2.5Y8/2)	
37	土師皿	復口 (8.8) 高 (1.6)	浅黃橙 (7.5YR8/4)	
38	土師皿	復口 (10.5) 高 (1.3)	にぶい黄橙 (7.5YR5/6)	
39	黒色土器碗	復底 (7.0)	明褐色 (7.5YR5/6)	A類
SD - 201				
40	須恵器壺蓋	復口 (15.0)	灰 (N6/0)	飛鳥V型式
41	須恵器壺蓋	復口 (15.8)	灰 (N5/0)	飛鳥V型式
42	土師皿	復口 (9.6) 高 (0.9)	浅黃橙 (7.5YR8/3)	「て」字状口縁
43	土師皿	復口 (8.0) 高 (1.1)	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	「て」字状口縁
44	瓦器碗	復底 (6.6)	灰 (N5/0) [断]灰白 (N8/0)	川越I-C型式
45	土師皿	口 (11.0) 高 (2.3)	にぶい橙 (7.5YR7/6)	
46	土師皿	復口 (13.8)	灰白 (10YR8/2)	
47	土師皿	復口 (13.6) 高 (2.2)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	
48	土師皿	復口 (15.8)	浅黃橙 (7.5YR8/3)	
49	埴仏	帽 (39.2)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	金箔付着、型作り

表2 遺物観察表1

NO.	器皿名	出土地名	外径幅 (mm)	法面 (mm)	色調	備考
50	新南文鏡寺弁蓋文瓦片				灰 (N6/0)	
51	新南文鏡寺文平瓦	SD-201上層	外径幅 (12)		灰 (N6/0)	
52	新南文鏡寺弁八瓣唐草文瓦片	SD-201上層	直径 (176)		灰 (N6/0)	
53	新南文鏡寺弁八瓣唐草文瓦片	SD-201上層	直径 (170)	内面絞 (32)	灰 (N6/0)	
54	新南文鏡寺文平瓦	SD-201上層	直径 (168)	外区付 (30) 外区付 (32) 内区付 (28) 上外区付 (3) 下外区付 (4) 庫内区付 (11)	灰 (N6/0)	
55	左二巴文瓦片	SX-101	直径 (163)	直径 (141)	灰 (N6/0)	
56	左三巴文瓦片	SX-101	直径 (135)	直径 (135)	灰 (N6/0)	

表3 陶物觀察表2

【例】

・口：口径 復口：復元口径 高：器高 底：底径 複底：複元底径 [断]：断面色調

・色調については「新南文鏡寺土色觸」に記した。

・各器種の欄年に以下との文献に記った。

瓦器編：川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』奈良國立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会,1983

瓦質研究：佐藤重郎「近世瓦器の発展と開拓」『中近世土器の基礎研究』II 日本中世土器研究会,1996

須恵器：古代の土器研究会編「古代の土器」 都城の土器集成,1992

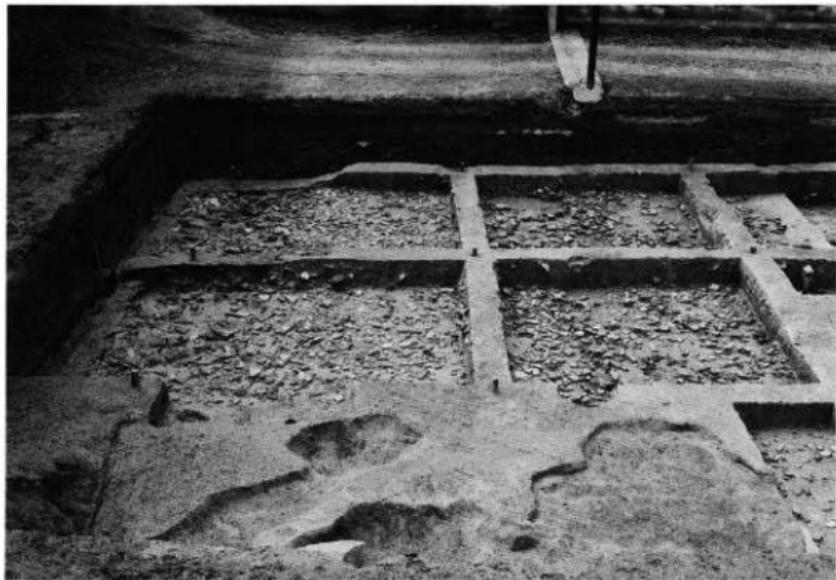
図 版



1 調査前風景（東より）



2 上層遺構完掘状況（南より）



1 鎌倉時代整地層最下面瓦碎片敷詰め状況（東より）



2 同上（西より）



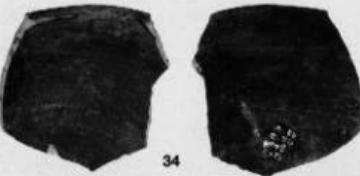
1 下層造構完掘状況（西より）



2 满塗区西壁土層



25



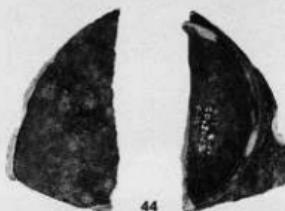
34



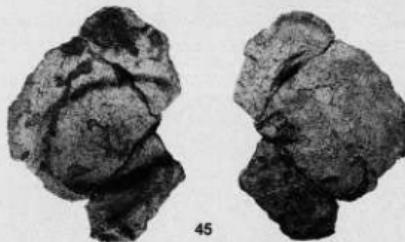
35



44



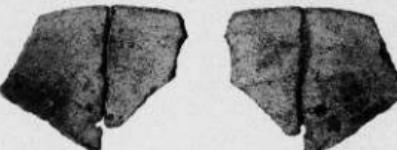
27



45



48





50



49



57



51



頸面



52



54



53



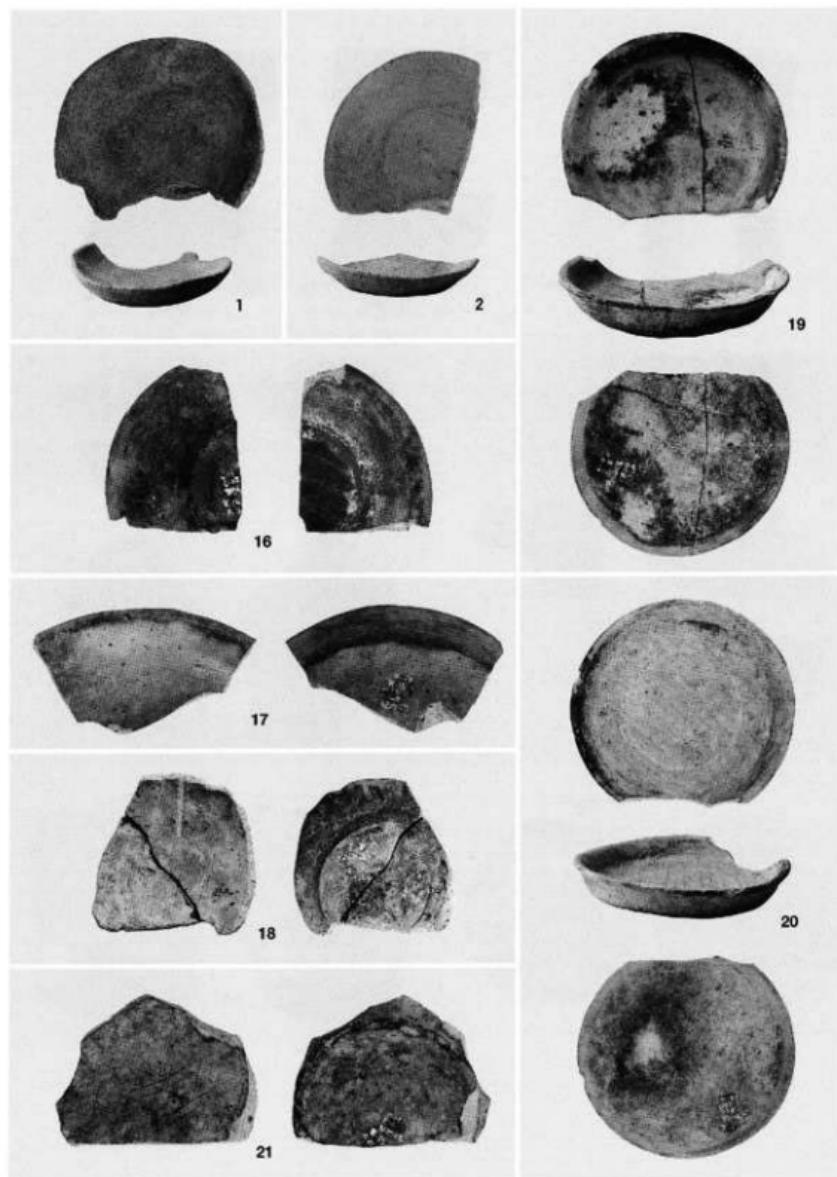
55



56



図版 6 楼安寺第8次(遺物③)





1 額安寺宝篋印塔遠景（北より）



2 額安寺宝篋印塔 西面



1 正覺寺寶瓶印塔



2 元祐模寶瓶印塔



3 余見寶瓶印塔



4 安養院寶瓶印塔

報告書抄録

ふりがな	がくあんじだい8じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	額安寺第8次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	8
編著者名	山川均・岡本智子
編集機関	大和郡市教育委員会
所在地	〒639-1007 大和郡山市南郡山町554-1
発行年月日	2003年8月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °°°	東經 °°°	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
がくあんじだい8 額安寺第8次	ならけんやまとこおりやまし 奈良県大和郡山市 ぬかたべてらまち 額田郡寺町36		29203			2001.2.13 ～ 2001.3.31	約200	範囲確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
額安寺第8次	寺院	古代～中世	中世の大規模な盛土	古代土器、瓦 中世土器、瓦	忍性との関わりを指摘

東池遺跡第1次発掘調査報告書

例　　言

- 1 本書は、大和郡山市額田部北町地内で実施した東池遺跡第1次発掘調査の報告書である。
- 2 調査は、(仮称)額田部健康運動公園造成事業に伴ない実施した。
- 3 調査期間、調査面積は下記の通りである。

調査期間 2001年5月16日～7月11日

調査面積 約660m²

- 4 調査は以下の組織で実施した。

現地調査

調査員：山川均（大和郡山市教育委員会　社会教育課）

補助員：岡本智子（奈良大学大学院）、下高大輔（奈良大学）

作業員：ワーク（有）

事務

大和郡山市公園緑地課公園緑地係

- 5 本書は、以下の分担で作成した。

製図・拓本・トレース：岡本

写真撮影：山川、岡本

執筆：山川〔I、II-(1)、III〕、岡本〔II-(2)〕

レイアウト：岡本

纏集：山川

- 6 調査に関わる写真・スライド・実測図および出土遺物は全て大和郡山市教育委員会で保管している。広く活用されたい。

凡　　例

- 1 遺構実測図に示した標高は、東京湾平均海面（T.P）からのプラス値である。
- 2 遺構実測図中の座標は、國土座標の第VI座標系に基づくものである。また、図中矢印で記した方位は座標北を表す。
- 3 遺物番号は全てが通し番号になっており、実測図・観察表、図版それぞれの対照が可能である。
- 4 遺物実測図の縮尺は1/3を基本とする。
- 5 遺物実測図の断面は、陶磁器・須恵器がベタ塗り、瓦器・瓦質土器、瓦が網かけ、土師器は白抜きとしている。
- 6 土色および遺物の色調に関しては、「新版標準土色帳」に依拠した。

本文目次

I はじめに	33
II 調査の概要	34
(1) 遺構・層序	34
(2) 遺物	38
III まとめ	40

図目次

図1 調査地点位置図	33
図2 第1トレンチ西壁（上）および第2トレンチ北壁（下）土層図（S：1/50）	34
図3 トレンチ配置図（S：1/1,000）および遺構平面図（S：1/200）	35～36
図4 墓輪・土器・陶磁器実測図（S：1/3）	37
図5 土製品および火打石実測図	38
図6 石器および剥片実測図	39
図7 出土銭貨拓影（原寸）	40
図8 現在の東池（南西より） 左手の道も『額田寺伽藍並条里図』に見える	42

表

表1 遺物観察表1	42
表2 遺物観察表2	42

図版目次

図版1 額田寺伽藍並条里図復元複製	43
図版2 調査地周辺空中写真	44
図版3 1 第1～3トレンチ調査前風景（東より）	45
2 第4トレンチ調査前風景（西より）	45
図版4 1 第1トレンチ完掘状況（南より）	46
2 第2トレンチ完掘状況（西より）	46
図版5 1 第3トレンチ完掘状況（南より）	47
2 第4トレンチ完掘状況（北より）	47
図版6 1 第2トレンチ西端部土層（南東より）	48
2 第4トレンチ南壁土層	48
図版7・8 遺物	49

I はじめに

今回の調査は、(仮称)額田郡運動公園の事業予定地が国宝「額田寺伽藍並条里図」(注1)の範囲内(周知の遺跡)に含まれるため、事業対象地における地下構造有無確認のために実施したものである(図版1)。調査期間は平成13年5月16日から7月11日まで、調査面積は約660m²である。なお、事業は盛土主体の運動公園造成となるため、地下構造は基本的に保全されている。

調査開始時、調査地は整地・盛土がなされていたが、図1および航空写真(図版2)に見るようすにかつては長地型の精緻な条里形水田が存在した区域である。この周囲の地割りが乱れているため、一見大和平野の広域条里とは独立した特殊な条里水田のようにも見受けられるが、実際は図1に明らかなように丘陵を隔てた東側の平群郡2里と3里の里境(図1右の矢印)から調査地西端の里道(同図左の矢印)までの距離が435m(ほぼ4町)を測ることから、この区域の条里形水田は広域条里と一体のものと理解される。なお、前述の「額田寺伽藍並条里図」には明確な土



図1 調査地点位置図(「大和国条里復元図」より一部改変)

地の利用状況は記載されていない。

以上の調査前の所見に基づき、今回の調査の主眼（古代以降）は、条里形水田の造作時期、さらに『額田寺伽藍並条里図』が作成された当時の土地利用状況を知ることの2点に置いた。

II 調査の概要

(1) 遺構・層序

調査区 今回の調査では、対象地に4本のトレンチを設定した（図2）。この内第4トレンチは進入道路の対象地になる丘陵部部分に設けた小規模なトレンチであり、調査の基本となるのは第1～3トレンチ（幅4m）である。

層序 図2が今回の基本的な土層堆積状況である。現在の耕作土（①層）下には肥前磁器片などを包含する近世の耕作土層（③層）がある。重機によって掘削したため詳細な時期は明確にできない。③層下には中世の耕作土層と思われる土層（④層）が存在する。大半を上記した近世耕作土によって削平されている。13～15世紀の遺物が若干出土したが、これも手掘による精査を行っていないので明確な時期幅は押さえている。⑤⑥層が後述する素掘小溝の堆積土である。13世紀代の遺物を包含し、これより新しい時期のものは含まない。先述の中世耕作土層（④層）とは包含する遺物に時期差が見られ、また明確な層界をなすことから、ここで見られた素掘小溝は連年の耕作によって継続的に生成されたものではなく、条里形耕地開発の初期段階において集中的に生成されたものと見なし得る。

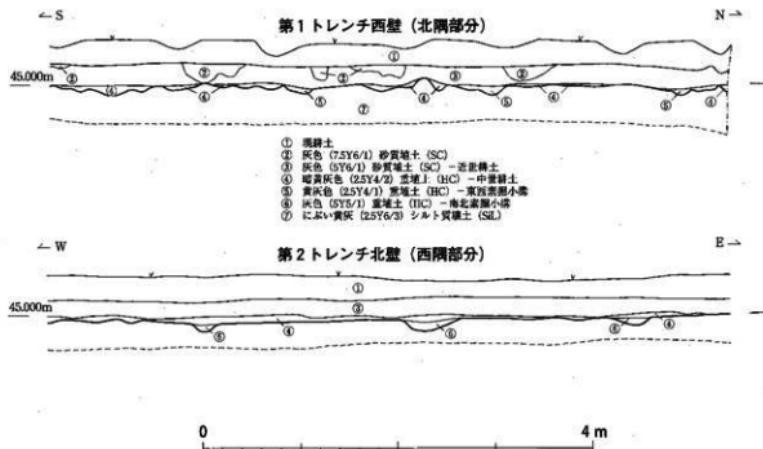


図2 第1トレンチ西壁（上）および第2トレンチ北壁（下）土層図（S:1/50）

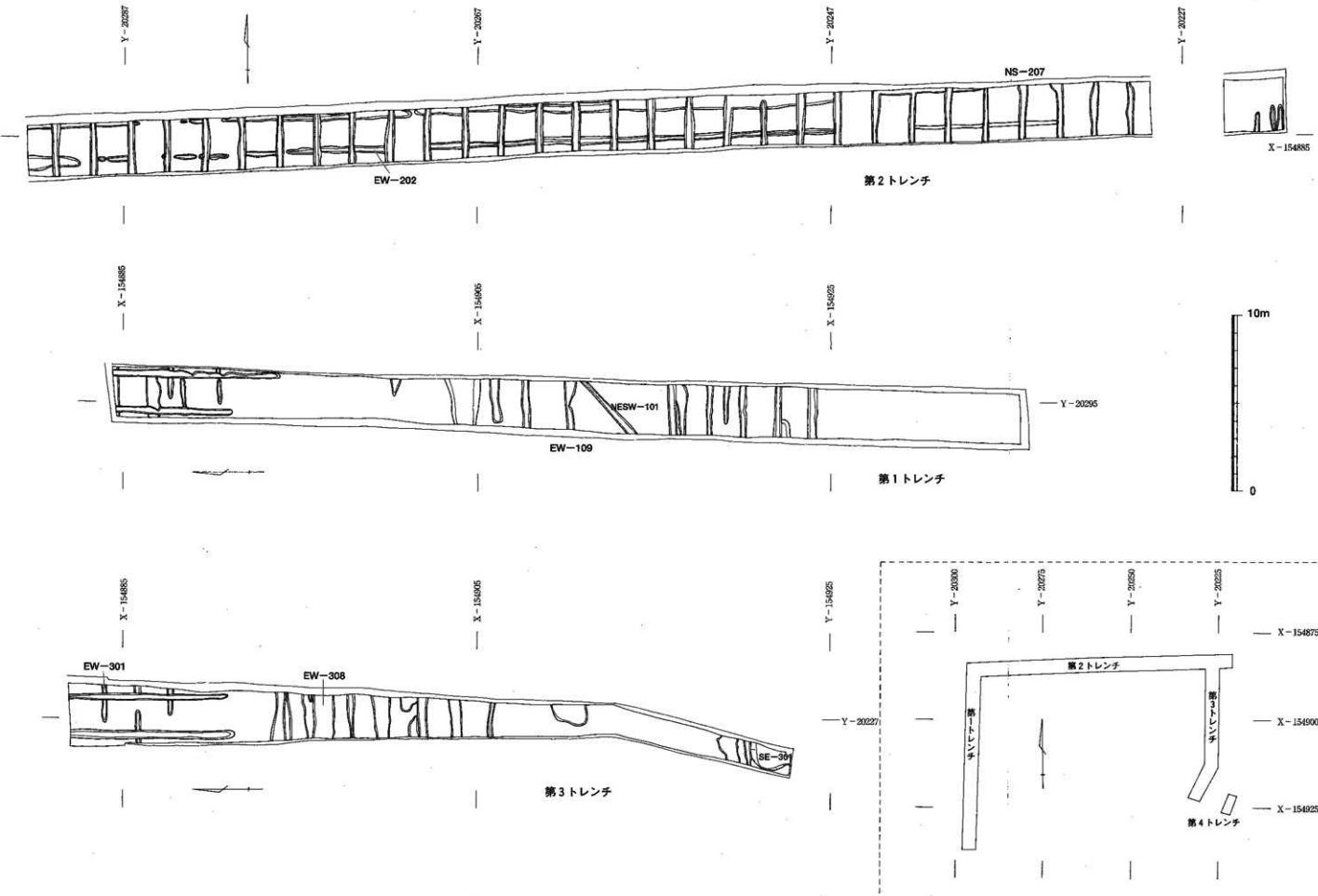


図3 トレンチ配置図 (S:1/1,000) および造構平面図 (S:1/200)

検出遺構 今回の調査で検出された遺構としては、第3トレンチ南端付近で近代の野井戸（SE-301）を1基と、第1トレンチで後述のNESW-101を検出した他はいずれも素掘小溝である。ここではまず素掘小溝について、それらが最も良好に検出された第2トレンチを中心にその概要を述べる。

素掘小溝には南北方向のもの（南北素掘小溝）と東西方向のもの（東西素掘小溝）があり、切り合ひ関係から南北素掘小溝が東西素掘小溝より新しいことが判明している。東西素掘小溝は幅30~40cm、深さは5cm程度で、比較的浅い。それぞれの間隔は1.8m（6尺）である。南北素掘小溝は幅30~50cm、深さは10cm程度のものが多く、東西素掘小溝より深い。それぞれの間隔は2.1m（7尺）である。東西素掘小溝、南北素掘小溝ともに遺構の底面には凹凸が少なく、耕作具のものと思われる痕跡は看取することができなかった。方向性については、東西素掘小溝が方眼東に対して約2°北偏し、南北素掘小溝が方眼北に対して約1°20'東偏する。この内、南北素掘小溝については測定条件が良好ではない（遺構の南北方向の検出長が短い）ため、その測定誤差を考慮すれば両者の関係はほぼ直交するものとしてよからう。時期については、南北素掘小溝から13世紀代の遺物が主体的に出土しており、また東西素掘小溝に関しても出土遺物の面からそれとの時期差を指摘することはできない。層序の説明で上記したように、これら素掘小溝に関しては、その規格的な設定条件（間隔が尺等間）も勘案するならば、条里形耕地開発の初期の段階において集中的に生成された遺構と見なすべきであろう（注2）。

次に、第1トレンチ中心よりやや南よりで検出された溝（NESW-101）は方眼北に対して約47°東偏しており、また埋積土も上記した中世の素掘小溝とは異なるものであった（幅約30~50cm、深さ約10cm）。こうした埋積土と同様の土層は第1トレンチの南半部分において部分的に確認されたもので（図3の図幅外）、出土遺物は微量ではあったが8世紀にさかのばる可能性が高いものである。すなわち本遺構は古代の水田に関係する遺構とも評価できる。以上の点より、調査地の少なくとも南半部分においては（中世の開発でほとんど削平されているものの）、古代にさかのばる時期の水田（耕地）が存在した可能性がある。しかし、その方向性は現在の大和広域条里（正方向）とは異なるものであった。なお、このことは8世紀に製作された『額田寺伽藍並条里図』が現在の「東池」（図版1）を描いており、その灌漑用水の供給先としては今回の調査地が最もふさわしい（注3）点からも補強されよう。

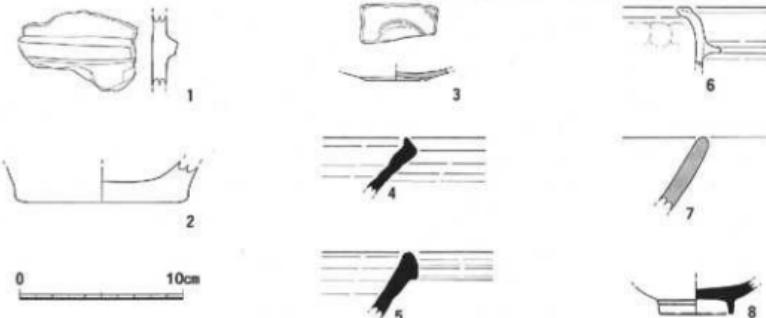


図4 墓輪・土器・陶磁器実測図 (S:1/3)

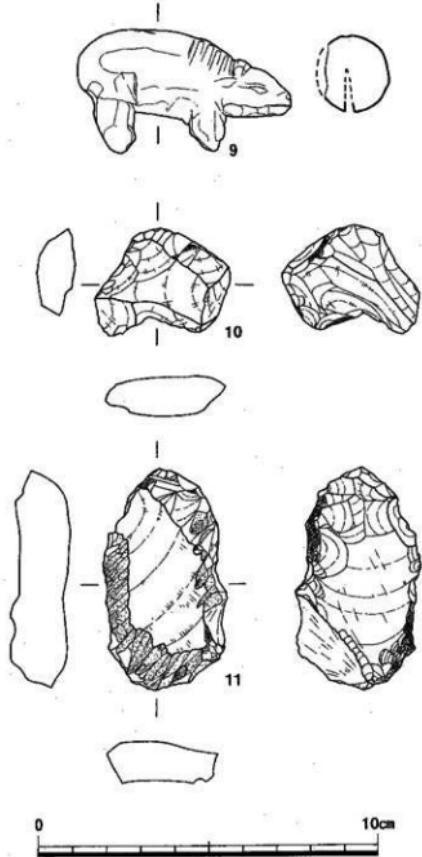


図5 土製品および火打石実測図

英・長石を多く含み、淡黄色を呈する。7は瓦質土器である。内外面とも表面が摩滅しているため調整は不明瞭であるが、断面形態から近江編年（近江1994）の2期、佐藤編年（佐藤1996）のB期にあたるものと考えられる。14世紀後半から15世紀前半。8は肥前系染付碗である。高台には2本の圈線を有し、色調は灰白色を呈する。小片なので詳細な時期は不明だが、17世紀代のものと考えられる。

なお、丘陵裾において造構確認のために設定した第4トレーニチにおいては、顕著な造構・遺物は確認できなかった（図版5）。

(2) 遺物

本遺跡から出土した遺物は非常に少なく、それらについても細片が多数を占めている。したがって、本報告においては図化可能なものを器種別にとりあげ、各々の出土地については観察表に記した。

埴輪・土器・陶磁器

1は円筒埴輪の突帯部である。突帯はヨコナデ調整を施し、色調は赤褐色を呈する。2は弥生土器で、壺の底部であると考えられる。胎土には長石・石英を多量に含む。3は瓦器椀である。見込みには同心円状の暗文を施す。川越編年Ⅲ-C型式（川越1983）。なお、素堀小溝からもこれとほぼ同時期とみられる瓦器椀の細片が数点出土している。4、5は東播系須恵器の鉢である。4は口縁端部を強くナデて、端部を突出させるが、5は口縁に突帯を形成している。それぞれ森田編年（森田1995）の第2段階第1期（12世紀中葉～後半）、第2期（12世紀末～13世紀初頭）にあたる。6は菅原分類（菅原1983）大和H型の土釜である。胎土には石

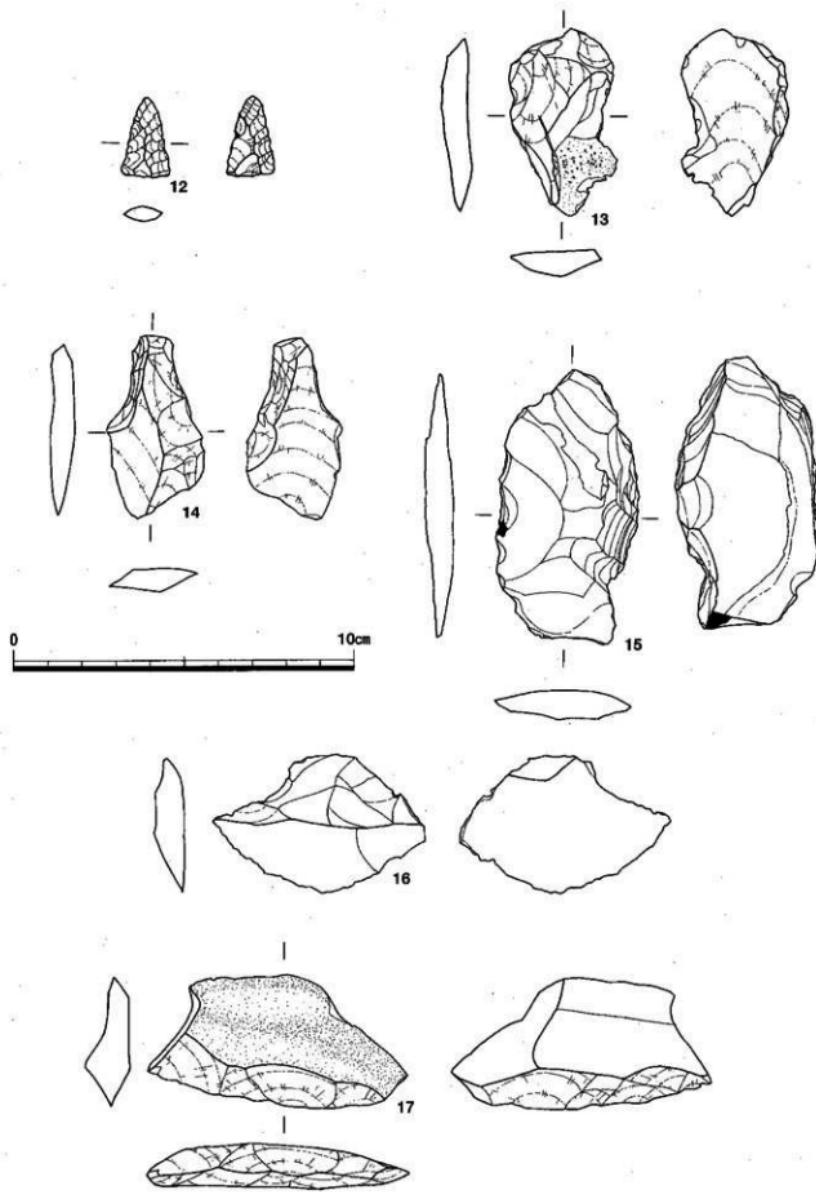


図6 石器および剥片実測図

その他の遺物



図7 出土銭貨拓影（原寸）

9は土人形であるが、動物の種類は不明である。背中部分に縞の表現があり、腹部分には穿孔を有する。想作り。包含層出土品のため詳細な時期は不明であるが、近世以降のものであろう。10、11は火打石である。サヌカイト製。12は平基無茎式石巣である。長さ28.1mm、幅39.2mm、厚さ10.6mmを測り、石材はサヌカイトである。13～17は剥片である。石材はすべてサヌカイトであるが、16、17については風化が著しい。18は寛永通寶である。古寛永で、初鑄年代は1636年である。

IIIまとめ

以下に、今回の調査によって得られた主要な知見について略述する。

- ・調査地においては、特にその南半において古代にさかのぼる水田が存在した可能性がある。
 - ・現代まで継続する正方位の条里形耕地が造作されるのは13世紀中葉頃のことである。
 - ・上記した条里形耕地の造作に際し、素掘小溝が掘られる。これらは尺等間で配置されており、正確な設計基準に基づく耕地開発が想定し得る。
- 先述の通り、今回の調査地周辺の条里区画は大和広域条里と一体のものである。13世紀代におけるこうした条里形耕地の造作に関しては大和郡山市中付田遺跡において良好な調査事例が報告されており（山川2000）、今後この遺跡とのデータ比較が必要であろう。

なお、調査地近辺が13世紀代において耕地として使用されていたことを示す文献史料として、次に掲げる「法橋寛永水田完券」（注4）がある。

※〔〕内は傍注

（端裏書）

「一町三段文 良覚坊分 浄土院法橋御子充文東池田殿池田文」

沽却 水田事

合堀町三段者 付疋田池

在額田部庄内東池田〔六段〕殿池田〔七段〕也

四至坪付在本券面

右件水田者、法橋寛永相伝之私領也、而先年令沽却比丘尼淨親房了、雖然依有子細、

弁儲本直畢、於田者返取者也、而今限直米三拾三石、相具本券永沽却勝縁院了、

仍勒新券文之状、件如

文永陸年十二月 日

光人（花押）

嫡男（花押）

二男（花押）

本史料は額安寺の元別当であった寛繼が文永6年（1269）に田地を勝縁院に売却した際の売券である。ここに記された「東池田」は、地名のみならずその6段という面積を勘案してもおそらく今回の調査地を指すものと思われる（『額田寺御藍並条里図』では廿四坪割）、かつ「殿池田」は調査地北隣接地に「殿ノ池」の地名が現存する（図1）ことから、そこを指すものと考えてよかろう。さらに、田地と併せて売却された「疋田池」については、当然のことながら東池のことを指すものと考えられる（水野2001）。したがって本史料から、13世紀後葉にはこの地区に明確な田地標記がなし得る程度の地割（条里形と考えてよいだろう）によって区画された水田が存在したこと、さらにその灌漑用水は東池に依っていたことが明らかである。

今回の調査で確認された素掘小溝の年代は、前述通り出土した瓦器碗の年代観から13世紀中葉頃と考えられる。寛繼が額安寺の別当職に在任したのは安貞2年（1228）から弘長元年（1261）のことなので（水野2001）、この地区に条里形耕地が造作されたのはまさに彼が別当在任のことであったと思われる。この頃の額安寺別当職は父子相伝であり、寛繼も父から別当職を襲い、子息にそれを伝えた。すなわち彼は妻帯の俗人でもあり、一種の在地領主的な性格を帯びた人物であったと思われる。こうした人物が開拓してさほど間のない条里形耕地（注5）を「私領」と呼び、それを沽却する拳にしている点にこの時期の耕地開発の性格が端的に示されているのかもしれない（注6）。その意味で、今回の調査は小規模ではあったものの、その意義は大きいものといえよう。今後も周辺地域の調査を綿密に実施してゆく必要があるだろう。

【注】

注1 本図の作成時期については、天平勝宝8年（756）6月を上限とし、天平宝字年間（757～765）をあまり下らない時期とされている（山川2000）。

注2 素掘小溝の設定とその機能に関しては（山川2000）参照。

注3 最近まで存在した調査地周辺の水田も、その灌漑水は東池（図1）から供給されていた。

注4 「額安寺古文書」28「大和郡山市史 史料編」。

注5 それはきわめて緻密な技術によって造作されるものであり、一在地領主がなし得るレベルのものではない（山川2000）。

注6 この点については近日中に別稿で詳細に論じたい。

【参考文献】

近江俊秀 1994「大和瓦質指鉢考」「研究紀要」2 由良大和古代文化研究会

川越俊一 1983「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」「文化財論叢」奈良国立文化財研究所創立30周年記念論集刊行会

佐藤理型 1996「大和における瓦質土器の展開と画期」「中近世土器の基礎研究」II 日本中世土器研究会

吉原正明 1983「畿内における土釜の製作と流通」「文化財論叢」奈良国立文化財研究所創立30周年記念論集刊行会

森田登 1995「中世須恵器」「概説中世の土器・陶磁器」中世土器研究会

水野章二 2001「中世の額安寺と周辺地域」「国立歴史民俗博物館研究報告」88

山川均 2000「大和郡山市中付田遺跡の発掘調査」「条里制・古代都市研究」16

山口英男 2001「『額田寺御藍並条里図』の作成過程について」「国立歴史民俗博物館研究報告」88

No.	器種名	出土地	計測値 (cm)	色調	胎土	備考
1	円筒埴輪	2トレンチ包含層		明黄褐色 (SYR5/6)	石英、長石、チャート多く含む	
2	陶瓦土器	1トレンチ包含層	復底 (10.0)	にぶい黃褐色 (10YR6/4)	長石、石英、雲母、チャート含む	
3	瓦器	1トレンチ包含層	復底 (3.8)	灰 (NA4/0)	石英、長石含む	
4	東播系頭巾器	2トレンチ包含層		黄灰 (2.5Y6/1)	長石、チャート含む	Ⅲ-2
5	東播系頭巾器	2トレンチEW-302		灰 (NA4/0)	長石、チャート含む	Ⅲ-2
6	土釜	3トレンチ包含層		淡青 (2.5YB3/0)	石英、長石含む	大和田型
7	瓦質櫛鉢	3トレンチ包含層		にぶい黄褐色 (10YR7/4)	石英、長石、チャート含む	A期
8	肥前系柴付碗	2トレンチNS-231	復底 (4.4)			
9	物形土製品	1トレンチ包含層	長 (6.1) 高 (3.3)	にぶい黄褐色 (7.5YR7/4)	雲母、長石、チャート多く含む	型作り

表1 遺物観察表1

No.	器種名	出土地	計測値 (mm)	備考
10	火打石	4トレンチ2号	長 (28.1) 幅 (39.2) 厚 (10.6)	サスカイト
11	火打石	3トレンチEW-308	長 (62.1) 幅 (33.0) 厚 (13.2)	サスカイト
12	石鏡	2トレンチNS-207	長 (21.0) 幅 (11.5) 厚 (0.8)	サスカイト
13	調片	1トレンチ包含層	長 (52.2) 幅 (29.2) 厚 (3.8)	サスカイト
14	調片	2トレンチ包含層	長 (57.0) 幅 (21.1) 厚 (8.3)	サスカイト
15	調片	1トレンチEW-109	長 (77.5) 幅 (37.6) 厚 (8.8)	サスカイト
16	調片	2トレンチEW-301	長 (37.7) 幅 (59.9) 厚 (7.3)	サスカイト
17	不定形刃器 (?)	2トレンチEW-202	長 (72.5) 幅 (33.3) 厚 (10.2)	サスカイト
18	寛永通寶	3トレンチ包含層	長 (21.8) 厚 (1.5)	古宣永 (1636-1659)

表2 遺物観察表2

【凡例】

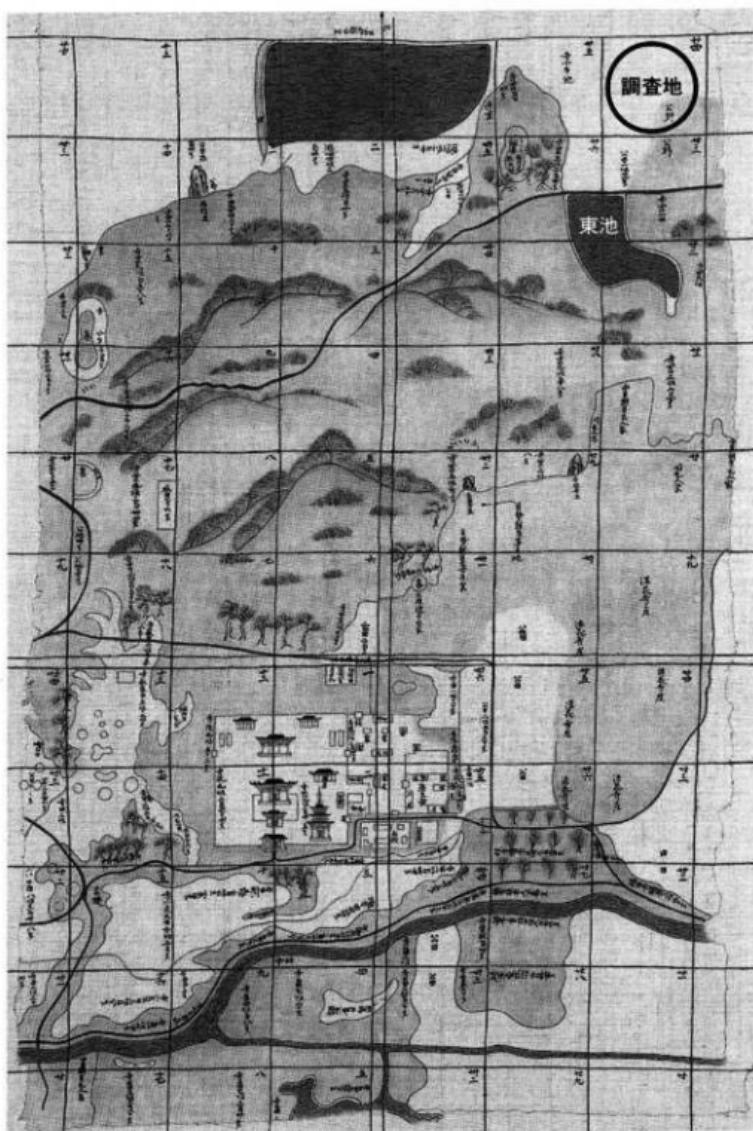
- 復元：復元程度
- 色調は「新版標準土色調」に従った。
- 各番号の紀年は以下の文献に従った。
- 東播系頭巾器：森田稔1995
- 瓦器柄：川島俊一1983
- 瓦質櫛鉢：佐藤圭一1996



図8 現在の東池（南西より） 左手の道も『額田寺伽藍並条里図』に見える（図版1参照）

図 版

図版1 東池遺跡第1次



頬田寺伽藍並条里復原複製（『國立歴史民俗博物館研究報告』88－図版43を改変）



調査地周辺空中写真（1963年9月28日撮影、図版1と同範囲）



1 第1～3トレンチ調査前風景（東より）



2 第4トレンチ調査前風景（西より）



1 第1トレンチ完掘状況（南より）



2 第2トレンチ完掘状況（西より）



1 第3トレンチ完掘状況（南より）



2 第4トレンチ完掘状況（北より）

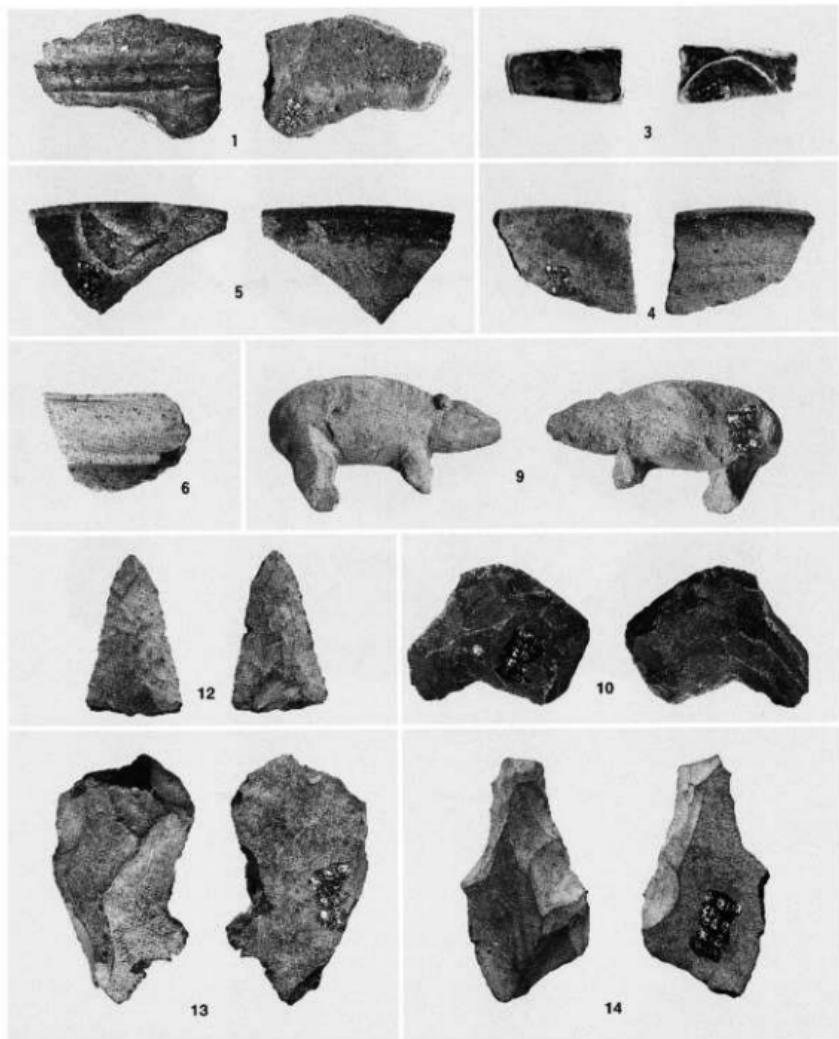


1 第2トレンチ西端部土層（南東より）

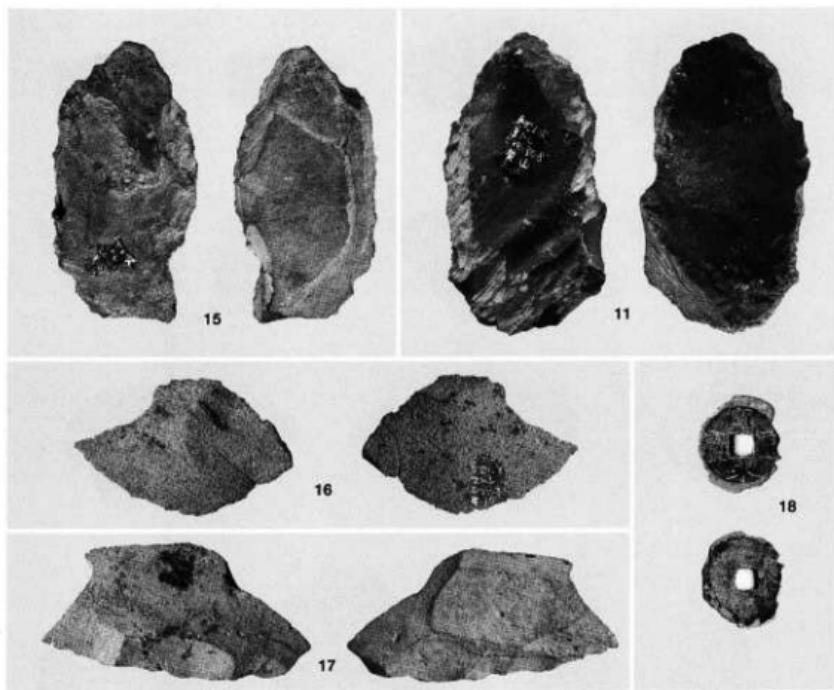


2 第4トレンチ南壁土層

圖版 7 東池遺跡第1次（遺物①）



圖版 8 東池遺跡第1次（遺物②）



報告書抄録

ふりがな	ひがしいけいせきだいじはくつちょうさほうこくしょ
書名	東池遺跡第1次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	8
編著者名	山川均・岡本智子
編集機関	大和郡山市教育委員会
所在地	〒639-1007 大和郡山市南郡山町554-1
発行年月日	2003年8月31日

所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東池遺跡第1次	ならけんやまとこおりやまし 奈良県大和郡山市 ぬかたべきたまちしない 額田郡北町地内		29203			2001.5.16 ～ 2001.7.11	約660	公園造成

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東池遺跡第1次	耕地	中世	茎掘小構	中世土器	

表紙：称名寺蔵（神奈川県立金沢文庫保管）忍性菩薩像
裏表紙：額安寺五輪塔Ⅰ納入剣製瓶形骨蔵器（良觀上人舍利容器、
『重要文化財額安寺五輪塔修理工事報告書』より）

大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集

額安寺第8次発掘調査報告書
付 東池遺跡第1次発掘調査報告書

平成15年8月31日

編集・発行 大和郡市教育委員会
大和郡山市南郡山町554-1

印 刷 明新印刷株式会社
奈良市南京終町3丁目464番地

